光の王国 6

# 銀砂の戦姫

# 序章　墓守

遠い昔、大いなる力があった。
魔法の技。
偉大な知識。
それは、忘れ去られしもの。
それは、失われしもの。
人は、失われたものを探し求める。
求めるもの、それは力。
人は、力を欲する。
他を凌駕するための力を――

乾期の乾燥した風が、土埃をまきあげる。
地平線まで続く、赤茶けた大地。
そんな荒涼とした平野の中に、石造りの建造物があった。
長い間土中に埋もれていたというのに、その表面にはわずかな風化の痕跡も認められない。
それは、王国時代に築かれたものであることの証だった。

今から千六百～千年前までの、強大な王国がこの大陸（コルシア）の過半を支配していた栄光の時代。
高度な魔法技術に支えられた、現在では『王国時代』と呼ばれているその光の時代は、トリニアとストレインという二大国の全面戦争によってその幕を下ろした。
そうして、続く長い闇の時代に、王国時代の大いなる技も知識も失われてしまった。
しかし、その遺跡は今も大陸の各地に遺（のこ）っている。
多くは、その場所すら知られることもなく。
ここも、そうした遺跡のひとつだった。
最近まで知られることのなかったこの遺跡で、発掘作業が続いている。
大勢の人夫たちが、遺跡を掘り起こし、土を運び出す。
その周囲にはまた、多くの武装した兵士たちもいた。
彼らは、遺跡の周囲を警戒している。
あるいは、人夫たちの中に他国の間諜が入り込

んでいないかどうかを。
遠い過去に大いなる力が存在し、現在ではそれが失われているこの世界において、考古学とは新技術、新兵器の開発にも等しい。
近年、国々の間で緊張が高まるにつれて、どこの国も王国時代の遺跡の捜索、発掘に力を入れていた。
だから、遺跡の深部に人夫たちの姿はなく、そこで発掘を行っているのは、ごく少数の、そしてより高い身分の者たちだった。

ネウサル・ヘプニ・リンディルディアは、サラート王国に仕える主席魔術師だ。
そして、この発掘計画の責任者でもある。
歳の頃は四十代後半、そろそろ髪に白いものが目立ってきている。
しかし、その瞳は若々しい情熱に輝いていた。
それも当然のこと。
ついに、この遺跡にあるもっとも貴重な宝のところまでたどり着いたのだから。
それは、棺。
この遺跡は、王国時代のとある貴族の墓所だった。
ただの墓所ではない。
ここに葬られているのは、普通の人間ではない。
ここは、竜騎士の墓所だった。
ネウサルの興奮は、最高潮に達する。
すぐさま、棺にかけられた封印の魔法を解きにかかった。
それは容易なことではない。
王国時代の魔法技術は、いまよりも遙かに優れたものだ。
それでも、少しずつ少しずつ、封印をはずしていく。
たとえそれが強固な封印で、彼の魔法が王国時代の魔術師より劣るとしても、固い岩盤に小さな穴を穿つようにして、封印を破ることは可能だった。
ネウサルはその作業に全神経を集中していた。

周りで作業している部下たちの姿も目に入らない。
彼の長所は、この集中力だった。
素質が同じなら、より高い集中力を持つ者の方が優れた魔術師となれる。
どれほどの時間が過ぎただろう。
やがて、ネウサルはふぅっと大きく息を吐き出した。
額に浮かんだ大粒の汗を手の甲で拭う。
そうして、棺の蓋に手をかけた。
音もなく、蓋が開く。
千年以上の間、一度も開かれたことのない蓋は、キィとも音を立てずに開いた。
棺の中に、本来そこにあるべき遺体はない。
戦場で命を落とした竜騎士の場合、遺体が残ることの方が珍しい。
普通は、本人の亡骸(なきがら)なしで葬儀が行われるのだ。
それは古い資料でわかっていたこと。
だから、彼の目的は竜騎士の遺体ではなかった。
たしかにそれも興味深い研究材料ではある。
常人を遙かに越えた魔力と運動能力を持つ竜騎士。
その能力は先天的なものなのか、後天的なものなのか。
それが解明できれば、遠い昔に失われた竜騎士の力を再び手に入れられるかもしれない。
しかし、今回はそれはお預けだ。
それでも棺には、それに劣らず興味深い、そして貴重な品が納められていた。
「見ろ、やはりあったぞ」
ネウサルは、棺の中からひと振りの剣をとりだした。
「……間違いない、竜騎士の剣だ」
興奮のあまり、声が、そして剣を持つ手が震えている。
竜騎士が持つ剣、それは、現在作ることができる普通の剣とはまるで違うものだった。
王国時代の、偉大なる魔法技術の結晶ともいえる品。
敵の魔法をはね返し、並大抵の武器では傷ひと

つつけることの叶わぬ竜の身体をも切り裂くことのできる武器だ。
たとえ竜騎士の力を持たない者が使用してもきわめて強力な武器となるが、それ以上に、この剣を作りだした魔法技術について調べることに意義があった。
現存する竜騎士の剣はそう多くはない。
そのような貴重な品が、まさか自国の領内で発見できるとは。
もしもその高度な魔法技術を手中にできれば、いまは小国に過ぎないサラートが、いずれは大陸の覇権を取ることも夢物語ではなくなるのだ。
ネウサルは、魅入られたように剣を見つめた。
千年以上も前の品でありながら、まるで研いだばかりであるかのように真新しく見える。
鞘に収められたままでも、その恐るべき力が伝わってくるようだった。
「へぇ、いいもの見つけたじゃない」

不意に聞こえたその声は、場違いな少女のものだった。
ネウサルは驚いて顔を上げる。
最初に目に入ったのは、鮮やかな金髪だった。
それ以上に目を引いたのは、いままで彼が見たこともない、鮮やかな金色の瞳。
目の前に、十五〜六歳くらいと思われる少女が立っていた。
「な、なんだ、お前はっ？」
発掘隊の中に、こんな少女がいるはずもない。
かといって、外から入り込めるはずもなかった。
現在この遺跡は、数百の兵士によって護られているのだ。
間違っても部外者を立ち入らせたりはしない。
いったいどこから現れたのか……。
訝しげに周囲を見回したネウサルの視線が、驚愕に凍りついた。
そこにあったものは……
折り重なる死体。
床に広がった紅い水たまり。

いま先刻まで彼とともに作業していたはずの部下たちと、警備の兵士たちだった。
ネウサルは、まったく気付かなかった。
いくら棺を開けるのに夢中になっていたとはいえ、悲鳴のひとつでも聞こえれば気付かないはずはない。
なのに、いつの間にか、その場で生きているのは彼ひとりだった。
「……！」
驚きと恐怖のあまり、声も出せずに硬直しているネウサルの手から、少女は剣を取り上げた。
無造作に剣を鞘から抜く。
その瞬間、刃から銀色の光が零れたように見えた。
「さすがは王国時代の業物、いい感じだねー」
短く口笛を吹くと、抜いた剣をネウサルに突きつける。
「ちょっと、切れ味を試してみようか？」
「ひっ！」
その言葉で、ネウサルは我に返った。

這うようにして、その場を逃げ出す。
しかし、通路に出たところでまた彼の動きは止まった。
「……な……に……」
そこもまた、血の海だった。
床といわず壁といわず、血にまみれている。
床に転がっているのは、死体と呼べるようなものではなく、ずたずたに引き裂かれた肉の塊。
吐き気をもよおす、生臭いにおいが充満している。
そして、その中に立つ、ひとつの人影があった。
屠殺場のごときこの場にはまったく不釣り合いな、美しい女性。
先ほどの金髪の少女よりもかなり年上だろう。
魔術師の証ともいえる、オルディカの樹で作った長い杖を持っていた。
ゆったりとしたローブにも、長い銀髪にも、一滴の血も浴びていない。
「ちょっと、話を聞かせてもらえないかしら？」
その女性は、静かな口調で言った。

「この遺跡の存在を、どこで知ったの？　そして、ここ以外の発掘計画は？　あなたくらいの地位なら、知っているのでしょう」
ネウサルはなにも答えなかった。
隠そうとしたわけではない。
ただ、まともな返事のできるような精神状態ではなかっただけだ。
なにも考えることすらできずに、彼は立ちつくしていた。
「もー、ソレアってば、なにまだるっこしいことやってるの！」
背後から、先刻の少女の声が聞こえた。
ネウサルは反射的に振り返る。
少女は、彼のすぐ後ろに立っていた。
こめかみに手が当てられる。
一瞬、頭の中でなにかが弾けたような衝撃が走り――
ネウサルの意識は、そこで途絶えた。

＊　＊　＊

目と、鼻と、耳から血を流して崩れ落ちる男の身体を、その金髪の少女はかすかな笑みすら浮かべて見おろしていた。
「……ファージ、ちょっとやり過ぎよ」
美しい銀髪の女性、ソレア・サハ・オルディカが眉をひそめて言う。
「いいじゃん、どうせ生かしてはおかないんだし。人間なんて口ではいくらでも嘘がつけるもの、直接頭の中を覗いた方が早いのさ」
自分の手についた血をぺろぺろと舐めながら、ファージ……ファーリッジ・ルゥ・レイシャは応えた。
「……で、わかったの？」
どことなくため息まじりのその台詞に、ファージはうなずく。
「連中だよ。ここの情報をサラートに漏らしたのは」
「やっぱり？　トカイ・ラーナ教会？」
やれやれ、とソレアが小さくつぶやいた。

「まあ、それはいいさ。こいつら、他の遺跡のことは知らないみたいだし」
ファージは、足元に転がる死体をつまさきでつつきながら言葉を続ける。
「それより、ちょっとまずいことが……」
「まずいこと？」
「また、戦争が始まる」
「サラートとカイザス？　毎年のことでしょう？」
やや困惑顔のファージに対し、ソレアは表情も変えずに言う。
国境を接している二つの王国、サラートとカイザスは、ここ数年、毎年のように領土をめぐって戦を繰り返していた。
ソレアの家があるタルコプの街はカイザスの領内にあるから、まったく無関係とはいえないが、それでもいまさら問題にするようなことではない。
そもそも、こんな小国同士の争いなど、現在の大陸（コルシア）では珍しくもないことだ。
ソレアには、ファージがなにを気にしているのかわからなかった。
「カイザスだけならいいんだけどね……。今回は、マイカラスが戦場になる」
ファージが口にした地名に、ソレアの眉がぴくりと動いた。
それは、聞き流せることではない。
それが事実なら、たしかに少しばかり面倒なことになるかもしれなかった。
「……ナコちゃんには、知らせない方がいいわね？」
「当然。知れば、行きたがるに決まってる」
ファージは吐き捨てるように言った。
「……そして、また傷つくんだ」
「困ったわね。ま、その問題はおいおい考えるとして……」
ソレアはそう言うと、ファージの手から剣を受け取る。
「とりあえず、ここの後始末はお願いね」
「え？　ソレアは？」
「先に帰るわ。今日はナコちゃんが来る約束だか

ら、食事の支度をしなくちゃ」
「ナコが来るのっ？　じゃ私も帰る！」
「それは駄目よ」
ソレアは、ファージの鼻先に人差し指を突きつけた。
「あなたは、まだやることが残っているでしょう。ファージが帰るまで引き留めておいてあげるから、ちゃんと始末してきなさい」
「ちぇっ」
ソレアは杖を振って、自分の周囲に魔法陣を描きだす。
転移魔法でその場を去るソレアの姿を、ファージはふくれっ面で見送っていた。

# 一章　あなたのために

女の子が泣いている。
まだ幼稚園か、せいぜい小学一年生くらいの小さな女の子。
住宅地の中の小さな公園。
その中の砂場の横で。
服や膝が、すこし汚れている。
両手を目に当てて、ぐすぐすと鼻を鳴らしている。
その声をかき消すように、公園の周囲の樹ではエゾハルゼミがさかんに鳴いていた。
泣いている女の子の隣には、もう少し年長の少女が立っている。
小学校の三〜四年生くらいだろうか。
「もう大丈夫だよ」
少女は大人びた口調で言いながら、泣いている女の子の頭をやさしくなでた。
その手や顔に、いくつかの真新しいあざが見える。

「あいつら、みんな逃げちゃったから」
少女の視線の先には、泣きながら公園を出ていく、同じ年頃の三人の男の子たちの姿があった。
「またいじめられたら、アタシに言いつけなよ。かたきをとってあげる」
「なこちゃん……」
泣いていた少女が、涙目で見上げる。
ちょっとタレ目気味の大きな目。
年長の少女は、ズボンのポケットからハンカチを出して涙を拭いてやる。
「大丈夫、アタシがあんな連中に負けるはずないっしょ。アタシ今度、空手を習うことにしたんだ。もっともっと強くなって、由維のこと守ってあげる」

＊　＊　＊

目を覚ましても、見ていた夢のことははっきりと憶えていた。
（なんだ、そうだったのか……）

奈子は心の中でつぶやく。
部屋の中は暗い。
まだ、夜中の一時か二時くらいだろう。
カーテンの隙間から差し込む街灯の明かりで、それでも室内の様子をぼんやりと見ることはできた。
（そうだったのか……）
奈子はもう一度つぶやく。
いままで、すっかり忘れていたこと。
空手を習いはじめた理由（わけ）。
たしかに、小さい頃から格闘技は好きだったけど……。
（由維のため、だったっけ……）
体が小さくて、泣き虫で、近所の男の子にいじめられることの多かった由維を守るのは、いつも奈子の役目だった。
だから、強くなりたかった。
「……あんたのせい、だったんだね」
となりで眠っている少女を起こさないように、小さな声でささやいた。

奈子の横では、由維が静かに寝息を立てている。
遊びにきた由維が泊まっていくのはいつものこと。
大きな奈子のシャツを、パジャマ代わりにして。
しばらくその寝顔を見おろしていた奈子は、そっと、由維の頬に唇を寄せた。
かすかな、触れるようなキス。
もちろん、そのくらいでは由維は目を覚まさない。
今度はもう少し大胆に、唇を重ねる。
それでも目覚める様子がないのを確かめた上で、由維が着ているシャツのボタンに手を伸ばした。
そぅっと、静かに。
ひとつずつボタンをはずしていく。
そうして、由維の小さな胸があらわになる。
暗い部屋の中で、肌の白さがひときわ目立つ。
由維の鎖骨のあたりにキスした奈子は、そのまま唇をすべらせた。
奈子の唇が胸のふくらみを登り、その頂上に達しようとしたとき。

「こら、奈子先輩のエッチ！」
突然の声に、奈子はぱっと飛び退いた。
くすくすと、笑い声が聞こえる。
「……！　あ、あんた、起きてたのっ？」
「ふつう起きますよぉ。こんなコトされたら」
片目を開けて笑いながら、由維は言った。
もっともな意見だ。
由維は別に怒っているわけではない。
悪戯な笑みを浮かべている。
シャツの前ははだけたまま。
ひかえめなふくらみが覗いている。
「眠ってる女の子にイタズラするなんて、いけないんだー」
「え、いや……その……」
奈子は口ごもる。
いくら言い訳しようとしても、弁解のしようもない。
だから、開き直ることにした。
「あ、あんたが、無防備に寝てるから悪いのっ！」

「あ、そう。じゃあ、帰って寝ようかな」
そう言うと、由維はベッドから抜け出そうとする。
「ま、待ってよ！」
奈子はつい反射的に、その手をつかまえる。
勝ち誇ったような表情を見せる由維。
その顔を見て、奈子は自分の負けを悟った。
「どうしてもって言うんなら、いてあげてもいいですけど？」
「うー」
奈子は悔しそうにうめき声を漏らす。
一瞬考えて、そのまま、由維をベッドに引き倒した。
由維の上に覆いかぶさり、耳元でささやく。
「……いて、お願い」
そのまま由維の耳にキスをする。
次に、頬にキス。
そして、唇を重ね合わせる。
「ん……ぅん」
由維の口から、小さく声が漏れる。

甘ったるい声。
奈子の手が、まだ未成熟な由維の胸を包みこんでいた。
先端の小さな突起を指でつまむ。
「……奈子先輩の……えっちぃ……」
そう言う由維の口を、もう一度キスをしてふさぐ。
二人の舌がからみあう。
「ん……ふぅ……ん……」
由維の胸を愛撫していた手が、ゆっくりと下へ滑っていく。
お腹の上。
そして、さらに下へ……。
「だぁーめ！」
かすかに笑みを浮かべながら、しかし由維は下着の中に滑り込もうとしていた手を押さえつける。
「奈子先輩、向こうで浮気してたでしょ。だから、ダーメ！　私、まだ怒ってるんだから」
「う……」
奈子は思わずたじろぐ。

由維の台詞は事実だった。
昨日、風呂上がりに由維に見られてしまった、胸に残ったキスマーク。
向こうに行ったとき、ファージにつけられたもの。
「これは……不可抗力よ！　ファージが無理やり……」
とりあえず、そう言っておく。
実際のところ、それは事実ではないのだが。
もちろん、由維はちゃんと見抜いていた。
「どうだか。最近の奈子先輩、すごくエッチだしぃー」
「……あ、あんたが人のこと言えるの？　だいたい、前は由維の方が積極的だったじゃない。それなのに、アタシがその気になったら今度はおあずけだなんて、ズルイよ！」
すねたように言う。
「……アタシじゃ、ダメなの？」
「そんなことないですよ」
由維は小さく笑う。

「私、奈子先輩のこと大好きだよ。昔から決めてたもの、バージンあげるのは奈子先輩だって」
「だったら……」
奈子がもう一度、由維の身体に手を伸ばそうとする。
その手を押さえつけて、
「でも、今はダメ」
にっこりと笑って、しかしきっぱりと言った。
「私の初めての人は、奈子先輩じゃなきゃダメなの。だけど、いまの奈子先輩は、ホントの奈子先輩じゃないから……だからダメ」
奈子には、由維の言わんとする意味が理解できなかった。
きょとんとした表情で、首をかしげる。
「……？　なにそれ？　どういうこと？」
アタシが、ホントのアタシじゃない……？
どうして？
由維ってばいったい、なにを言っているの？
しかし由維は奈子の問いには答えず、ただチェシャー猫のように笑っているだけだった。

## 二章　創造物

大陸最大の大河、コルザ川の上流にその都市はあった。

トゥラシ。

この地方では最大の、そして大陸中でも十指に入る大都市だ。

街の中心にある丘の上に建つ、ひときわ大きな神殿が目を引く。

現在の大陸で最大の勢力を誇るトカイ・ラーナ教会の総本山。

アルンシル、と呼ばれる。

その、最深部にあるひとつの部屋で――

＊　＊　＊

広さはそれほどでもない、しかし、天井は高く、豪華な装飾の施された部屋。

普通の者ならば、足を踏み入れただけで圧倒されてしまうような雰囲気があった。

この場に立つ者を畏怖させる、なんらかの力が働いているようにも思える。

正面には、そこに座る者の地位の高さをうかがわせる大きな机。

席に着いているのは、見たところ六十歳くらいと思われる男。

最高位の法衣を身にまとっている。

彫りの深い顔には、長年にわたって人の上に立ってきた者特有の威厳が感じられた。

しかし、いまこの男の前に立っている若者には、物怖じした様子はみじんも感じられない。

歳は二十前後、中肉中背で、どちらかといえば子供っぽい、人なつっこい顔をしている。

鮮やかな赤い髪を除けば、それほど特徴のある外見ではない。

一見、若い修道士か、教会付属の学院で学ぶ学生のようにも見える。

しかし、本当に見た目どおりの身分の者なら、この場にいられるわけがない。

トカイ・ラーナ教会で第三の権力者とされるラ

トゥーリ・キクル大司教の前で、呑気な笑みなど浮かべていられるはずがないのだ。
「なるほど、な」
ラトゥーリは重々しい声でつぶやいた。
「黒の剣はアルトゥル王国にはない、ということか。アルワライェ？」
「ええ、もちろん、連中も血眼になって探してますけどね。僕たちと同様、これといった手がかりは見つけていない。これは間違いないですよ」
アルワライェと呼ばれた赤毛の青年は、笑いながら応える。
相手に対する敬意などというものは、ほとんど感じられない口調だ。
しかしそれがいつものことなのか、ラトゥーリはそんな不遜な言葉遣いについていちいち咎めたりはしない。
「五十年以上もの間、黒の剣は歴史の表舞台には出ていないというわけだ。なんとしても我々が手に入れなければならん。アルトゥルやハレイトンに先を越されるわけにはいかん。もちろん、それ以外の国にもだがな」
「手に入れたところで、使える者がいるはずもない。杞憂ですよ。だいたい、そんな大昔の遺物にばかり頼ってどうするんです」
いくぶん、挑発的な口調だった。
「そうとも言い切れまい。それに、無銘の剣が墓守どもの手中にあるとなると、なんとしても黒の剣は欲しい」
「無銘の剣を奪い取るというのはどうです？」
アルワライェの顔には、それまでの人なつっこい表情とは少し違う、危険な笑みが浮かんでいる。
ラトゥーリはしばらくの間、アルワライェを見つめていた。
「いや、それはまだ早い。とにかく今は、黒の剣を探すことと、純粋な竜騎士の血を探すこと。それがお前の仕事だ」
アルワライェは肩をすくめる。
そんな仕事は不本意だ、といわんばかりに。
「不満か？」
「退屈ですね。せめて、今度のサラートの戦には

行かせてくださいよ。たまには実戦も経験しないと、身体がなまっちゃいますから」
「サラートとマイカラスの戦か？　あれこそ、お前が行くほどのことではあるまい」
「マイカラスには、因縁がありますよ」
「ああ……そうだったな。しかし、自分の仕事を忘れるな。それさえ心がけているならあとは好きにしろ」
「わかってますって」
言いながら、アルワライェは回れ右をする。
退出するアルワライェの背中を、ラトゥーリはため息まじりに見送っていた。

「まったく、年寄りは話がくどくていかんよなー」
人気のない廊下を歩きながら、アルワライェは大きく伸びをする。
ふぅっ、と息を吐き出して。
最初、まっすぐ自分の私室へ戻るつもりでいたのだが、途中で気を変えた。
途中で進路を変え、ひとつの扉の前で立ち止まる。
なにかを考えているような様子で扉を見つめ、そして、ノックもせずにそれを開けた。
正面に大きな窓のある部屋の中は、薄暗い廊下を歩いてきた目にはひどくまぶしく感じる。
部屋の中央に置かれたテーブルで、一人の女性が午後のお茶を楽しんでいるところだった。
アルワライェと同世代だろう。
女性にしては背が高く、成人男性としては平均的なアルワライェとほとんど変わらない。
アルワライェよりもややくすんだ色の赤毛を、肩に軽くかかるくらいに切りそろえている。
その女性は、鋭い目でアルワライェを見た。
「戻ってたんだ、アル」
「ああ、収穫はなかったけどね。黒剣の王はアルトゥル王国にはいない」
空いている椅子に腰掛けながら、アルワライェは応えた。

彼の前に、湯気を立てているティーカップがふっと現れる。
「ふぅん……、本当にあるの？　黒の剣なんて。そんなものに頼らなくたって、私とアルがいれば、大陸統一だってできるよ。あ、なにかお菓子でも出す？」
「いや、いい。俺も同意見だけどね、でも、邪魔になりそうなものは先に排除しておいた方がいいだろう？」
そこで言葉を切って、アルワライェはカップを口に運んだ。
口元に笑みが浮かんでいる。
女の方が、指を折りながら言葉を続ける。
「アルトゥル王国、ハレイトン王国、聖跡、黒剣の王、ファーリッジ・ルゥとソレア・サハ、それにフェイリア・ルゥも？　ところでこれ、今年の新茶なんだけど、去年より少し味が落ちたと思わない？」
「春先の霜のせいかな」
よく考えれば、ひどく異質な会話だった。

この二人、『大陸統一』などという大それた話題を、お茶やお菓子の話と同列に扱っている。
しかし彼らにとっては、それが当たり前のことであるらしかった。
「邪魔者は順番に片付けていくわ。そして、最後にはこの……」
他に聞いている者がいないとはいえ、この教会内で決して言ってはいけないことを楽しそうに言う女の唇を、アルワライェは人差し指で押さえた。
「それは言っちゃいけない。それと、あともう一つ忘れてた。無銘の剣と、その所有者」
「それは、私がやろうか？　どうせしばらくは暇だし」
女は、空になったティーカップを手でもてあそびながら言った。
「ナコ・ウェル・マツミヤ……だっけ？」
アルワライェがうなずく。
「あんたは左手の怨みがあるものね。生きたまま手足を切り落として、身体にきれいなリボンをかけてあんたにプレゼントしてあげる」

パンッ
なにもしていないのに、突然、女の手の中のカップが粉々に砕けた。
女は笑っている。
狂気に満ちた、ゆがんだ笑み。
つられて、アルワライェも喉の奥でくっくと笑う。
女は立ち上がると、アルワライェの後ろに回った。
背後から身体に腕を回し、耳元に口を寄せる。
「どぉ？　もうすぐ、あんたの誕生日でしょ」
「いいね。最高のプレゼントだよ、姉さん」

## 三章　休日

「キレイ……」

奈子の口から、思わず感嘆の声が漏れる。

目の前に広がる風景。

澄んだ水をたたえた無数の池、花が咲き乱れる湿原。

その周りを囲むような森。

国土の大半が砂漠か嶮しい山であるマイカラス王国には珍しい景色だった。

水面にはたくさんの水鳥が羽根を休めている。

池からあふれた水は、小さな川となって流れ出していた。

「ホントにきれい。王都の近くにこんな場所があったなんて……」

「山脈からの地下水脈が、ここで地表に顔を出しているんですよ。だから、乾期でも水が涸れない。ここが王都の水源なんです」

奈子の隣に立つ長身の男が言う。

美形だった。

思わず見とれるほどの美しい顔立ちをしているが、それでいてなお、精悍さをただよわせている。

よく鍛えられた、均整のとれた体格である。

ハルトインカル・ウェル・アイサール。

親しい者は、ハルティと呼ぶ。

昨年、先王の死によって即位したばかりの、マイカラスの若き王だ。

奈子は昨年、マイカラスで起きたクーデターの際に、ハルティとその妹アイミィの命を救っており、マイカラス王国とは浅からぬ因縁があった。

ハルティとアイミィの友人として、いまでも時々マイカラスを訪れる。

「たぶん我が国でいちばん美しい場所でしょう。だから、あなたに見せてあげたかった」

奈子の肩を抱くようにして、ハルティが耳元でささやいた。

「……できれば、二人きりで、ね」

奈子にだけ聞こえるように、そう付け加える。

あきらめに似たため息をもらすと、背後を振り返った。

奈子も苦笑しながらそれに倣う。
彼らは、二人だけでここにいるわけではなかった。
ハルティの妹、アイミィ・ウェル・アイサール。マイカラスの騎士で、プロレスラー並みの体格をしたケイウェリ・ライ・ダイアン。
長い銀髪が美しい女騎士ダルジィ・フォア・ハイダー、彼女の剣の腕はマイカラスでも三本の指に入るといわれる。
計三人が背後に立っていた。
「お兄さま、いつまで私のナコ様にくっついてるの？　もう！」
アイミィが奈子の腕を引っ張って、ハルティから引き離す。
ハルティは忌々しげに妹を睨んだ。
そんな様子をケイウェリは面白そうに見ている。吹き出しそうになるのをこらえているような表情だ。
ダルジィはどことなく不機嫌そうである。
その向こうでは、五頭の馬がのんびりと草を食(は)んでいた。
今日は、久しぶりにマイカラスを訪れた奈子を、ハルティが遠乗りに誘ったのだ。
どうやら彼は奈子に特別な感情を持っているらしい。
だからもちろん二人きりで行くつもりだったのだが、周囲がそれを許さなかった。
兄同様に奈子を気に入っているアイミィに見つかったのがそもそも運の尽きだった。
気がつくと、騎士団のケイウェリやダルジィも一行に加わっていた。
「少しは気を利かせようとは思わないのか……」
そんなハルティの独り言が聞こえる距離にいたのは、ケイウェリ一人だった。
ダルジィは少し離れたところに立っているし、奈子とアイミィは向こうの小川のほとりで遊んでいる。
「まあ、そうしてあげたいところですけどね。いちおう立場上、陛下を一人で外出させると、あとで私が長老たちに文句を言われるので」

相かわらず、笑いをこらえているような表情でケイウェリは言った。
並みの成人男子より頭半分以上高い大男だが、いつも笑っているような顔をしているためにあまり威圧感は感じられない。
ハルティより五歳年上のケイウェリは、騎士団でも最高の実力の持ち主で、まだ王子だった頃のハルティに剣技を教えたのも彼だった。
ために、国王と臣下という立場であってもその口調は親しげだ。
ハルティにとっても、年上の友人のようなものだった。
「陛下はもう少し、ご自身の立場というものを自覚するべきでは？」
言ってることは正論だが、明らかにからかっているような口調だった。
もちろん彼は、ハルティの奈子に対する思いを知っている。
知っていてからかっているのだ。
「やれやれ、面倒なことだな」
「陛下に万が一のことがあったらどうするんですか」
いつの間にか傍に来ていたダルジィが言う。
彼女の口調はいたって真剣だ。
「昨年あんなことがあったばかりで、護衛もつけずに外に出るなんて無茶です！」
「私の力を信用しないのかい？」
ハルティは不満げに言う。
彼自身、騎士としての腕前は超一流だった。
並の騎士の五～六人くらい、苦もなくあしらえる。
「そういう問題ではありません！」
怒ったように言うダルジィを、ケイウェリは午後のお茶の支度をしながら笑って見ている。
見かけによらず、この男はこういったことが得意だった。
「ところで、ナコ・ウェル……」
午後のお茶がすんだ頃、ケイウェリが言った。

「もしよかったら、君の技を教えてくれないか？」
「え？」
突然のことに、一瞬、なにを言われたのかわからなかった。
「あの、剣も魔法も使わずに大の男を倒す技さ」
「ああ……」
奈子はうなずく。
この世界には、高度な徒手格闘技術は存在しない。
誰もが当たり前のように魔法を使うからだ。
奈子が見せる空手や柔術の技は、ここの住人の目にはきわめて奇妙なものに映る。
戦闘のプロであるケイウェリが、興味を持つのも無理のないことだった。
「教えるっていってもねぇ……、アタシ、指導員の資格は持っていないし、どう教えたらいいのかな……」
いくら一流の騎士とはいえ、格闘技の基礎知識を持たない相手である。
奈子の困惑も当然だった。
しかしケイウェリは簡単に応える。
「なぁに、これでも剣と魔法の戦いに関してはちょっとしたものなんだから、身体でおぼえるよ。遠慮せずにやってくれ」
そう言って立ち上がる。
「そぉ？　じゃあ……」
奈子も立ち上がると、三メートルほどの距離を置いて向かい合った。
軽く腰を落として、身体の前で拳を構える。
ハルティとアイミィは興味深そうに見ている。
ダルジィも、興味なさそうなふりをして、ちゃんと横目で見ていた。
「まずは基本的な技から……」
言った瞬間、三メートルの間合いを一瞬で詰めて、奈子はケイウェリの目の前にいた。
突然のことに、ケイウェリは反応できない。
無防備な腹に拳を打ち込む。
傍目にはそれほど力を込めているようにも見えなかったのに、ケイウェリは腹を押さえて顔をゆ

がませた。
さすがに、恵まれた体格のために倒れはしなかったが。
小さくうめき声を漏らす。
「……足捌きはまあわかるとしても……女の子に殴られて、これほど効くとはね……。殴り方にも、なにか秘密があるんだな」
「そう。まず第一に、前進する勢いをそのまま拳に乗せる。そして、足先から膝、股関節、腰、肩、肘……すべての関節の動きを同調させて、全身のあらゆる力を拳に集中させるんですよ」
いまの動きを今度はゆっくりと再現する。
この突きの完成型が、極闘流の奥義『衝』だった。
言葉で言うのは簡単だが、それを実際に、動いている相手に極めるのは容易ではない。
「じゃあ今度は、ケイウェリ様がアタシを殴ってみてください」
「いいのかい？」
「ええ、力いっぱい、ね」
奈子が微笑んで言うので、ケイウェリは遠慮なくそれに従った。
いま見た奈子の動きを真似て、奈子の胸の真ん中を殴りつける。
腕力には自信があるが、手加減はしなかった。
ケイウェリ本人もギャラリーたちも、奈子がかわし方の手本を見せるのだと思っていた。
しかしその予想を裏切り、奈子はケイウェリの拳をまともに受ける。
拳が当たる瞬間、ほんの少し身体を動かしただけだ。
なのに、ケイウェリの拳を受け止めて、びくともしない。
殴ったケイウェリ自身が、信じられないという表情をしていた。
「ウソだろ……おい」
「このとおり、殴るという動作は、ほんの少し当たる位置が前後にずれただけで、本来の力は出ないんですよ。最高の威力が得られるのは、きわめて狭い範囲でしかない。攻撃するときは確実にそ

の位置で当てて、逆に相手の攻撃を受けるときは、常に当たるポイントをずらすように心がけることです」
平然と笑って言う奈子を、他の四人は驚きをもって見ていた。
「次に蹴り技ですけど……、実戦で狙うのは、普通、相手の腰より下ですね。特に有効なのは、膝への攻撃」
言いながら、至近距離からの足刀（そくとう）を繰り出す。
これは寸止めで、ケイウェリの膝に踵が触れるか触れないかというところで足を止めた。
「男性相手なら、股間とか」
同じく寸止めの前蹴りで、金的を狙う。
どちらも、足の動きが見えないくらい速かった。
「蹴りであまり高い位置を狙うのは難しいけど、相手に隙があるときは一撃で倒すことができますよ」
言うと同時に、奈子の足がはね上がった。
上段の回し蹴りが、ケイウェリのこめかみぎりぎりで止まる。
これはかなりショックだったようだ。
なにしろケイウェリの身長は百九十センチはある。
それに対して奈子はせいぜい百六十三センチ。
見事なまでの柔軟性とバランス感覚を備えていた。
ケイウェリは冷や汗をかきながらも、
「下着が見えるよ、ナコ・ウェル」
などと言うあたりが彼らしい。
「どこを見てるんですか！」
顔は笑っている奈子だが、その眉間にしわが寄る。
無造作にケイウェリの腕をつかんだ。
「い……痛たたたっ！」
「関節技は見た目は地味だけど、非常に効果的。人は、殴られる痛みは我慢できても、関節を極められる痛みは我慢できないですから」
立ったままの腕がらみで、ケイウェリの肘関節を極めていた。
さすがのケイウェリも苦痛の声を上げる。

こんな調子で、奈子の格闘技レクチャーはしばらく続いた。
次々と繰り出される奈子の技に、ハルティもアイミィも、言葉を失って見入っていた。

王宮への帰り道。
時刻はすでに夕方で、地面には影が長く伸びていた。
奈子、ハルティ、アイミィの三人の馬は、並んで歩いている。
奈子が真ん中だ。
そうしないと、誰が奈子の隣になるか、で喧嘩になるからだ。
余談だが、奈子は馬に乗れる。
母親が乗馬を趣味にしていて、よく奈子を連れて行ってたからだ。
この世界の騎士のように、騎乗したまま剣を振り回すような真似はとても無理だが、軽い駆け足くらいならどうということはない。

十勝平野や根釧原野で鍛えた腕前だ。
ケイウェリとダルジィは、三人より少し後ろにいた。
小声で話せば、前には聞こえないくらいの距離を空けて。
「ずいぶんと熱心だったわね。体中傷だらけになってまでやる価値のあること？」
やや嘲るような調子でダルジィが訊く。
「技もそうだけど、俺はナコ・ウェル本人に興味があるんだよ」
ケイウェリは笑って応えるが、その言葉を聞いてダルジィの顔色が変わる。
「二十八にもなって浮いた噂のひとつも聞かないと思ったら……あんたってそういう趣味だったの？　あんな、十五歳の小娘相手に……」
汚らわしいものでも見るような目つきのダルジィを見て、ケイウェリは言葉が足りなかったことに気付く。
「ダルジィ……お前なにか勘違いしてないか？　興味って、そういう意味じゃないぞ」

「じゃあ、なによ？」
「お前は気にならないか？　あの娘が何者なのか」
そう言われて、ダルジィも気が付いた。
ケイウェリやダルジィはもちろん、ハルティやアイミィにとっても、奈子の素性は謎だ。
出身も、これまでの経歴も。
名の知られた魔術師、ファーリッジ・ルゥやソレア・サハの友人であるということ以外、奈子のことはなにもわからない。
本人もそのことに話題が及ぶと、曖昧に言葉を濁す。
なにか隠していることがある、素性を明らかにできない事情がある――それだけはわかる。
「あの、徒手で闘う技も不思議だよな。大陸中どこを探したって、あんな技は伝えられていない」
「あの子が、自分で考えたんじゃ……？」
そう言いかけて、ダルジィも気付いた。
奈子は先刻、「アタシ、指導員の資格は持っていないし……」と、たしかにそう言った。
高度な剣技や魔法と同じく、それを教える資格を持った者がいるということだ。
それはつまり、奈子の技が個人であみ出したものではなく、それなりの人数によって伝えられているということを意味する。
その技を伝える人間が大勢いるのに、大陸の他の土地ではまったく知られていないというのは奇妙だった。
噂くらいは聞いたことがあってもいいはずだ。
「あの技は、ひとりふたりの思いつきで完成できるものではない。大勢の人間が、長い年月をかけて磨きあげてきたもののはずだ。トリニアの時代から伝えられる、俺たちの魔法や剣技と同様に、な」
「だけど……」
「もう一つ、奇妙なことがある」
ケイウェリが人差し指を立てる。
「今日、見せてもらった技の多くは、徒手の者同士の闘いを想定したものだ。そんなことがあると思うかい？」

「まさか……」
怪訝そうな顔をするダルジィ。
たとえば、大陸のどこか辺境の地では、徒手で闘う技がひそかに伝えられている――そこまでは認めてもいい。
しかし、その闘う相手は、剣を持ち魔法を使う人間のはずだ。
人が闘うときは、そうするのが普通なのだから。
闘いのために練られてきた技なら、普通の闘い方――剣と魔法――を相手にできなければならない。
「ナコ・ウェル自身は剣を持った相手とも闘っていたけどね。今日見せてくれた、おそらくは基本的な技の多くは、徒手の、しかも魔法を使わない相手にのみ通用するものだ」
そのことは、見ていたダルジィも感じていた。
先刻のケイウェリは剣も魔法も使わずにいたが、そうでなければ簡単に捌けた攻撃も多かったはずだ。
つまり、剣や魔法と闘うことを想定していない技ということ。
「それに、知ってるかい？　陛下と初めて会った頃、彼女は『魔法が使えない』と漏らしたそうだよ。いまは、そうでもないようだけど……ソレア・サハに教わっているみたいだな」
「まさか！」
ダルジィは思わず大声を上げそうになり、あわてて声を落とす。
「魔法の力はある。なのに、魔法が使えなかった……？」
たしかに、ごくまれに魔法が使えない人間はいる。
数千～数万人に一人くらいの割合だろうか。
しかしそれは先天的な障害であり、魔法の素養を欠いた一種の奇形だ。
後で訓練したからといってどうにかなるものではない。
正常な人間なら、子供の頃から本能的に魔法を使える。
もちろん、高度な技を使うには相応の訓練が必

要ではあるが、専門の魔術師や騎士が用いる強力な魔法を除けば、日常生活の中で自然と身に付くものだ。
「な、いろいろと興味深い人間だろう？　ナコ・ウェルは」
笑いながらケイウェリが言う。
「陛下を守る義務のある身としては、陛下に近づく人間には気を配らなければならない。たとえそれが、陛下のお気に入りの女の子であってもね。ナコ・ウェルには奇妙な点が多すぎる」
「まさか、陛下を……」
ダルジィがすぅっと目を細める。
いくぶん、殺気がこもっているような目だ。
しかしケイウェリはその疑念を否定する。
「いや、ナコ・ウェル自身には悪意はないだろう。それは信用していいと思う」
ケイウェリは表情を変えていない。
「しかし、背後関係がわからん。あの技を見る限り、なんらかの組織が存在する可能性は否定できない。一応、気をつけておいた方がいい」

＊　＊　＊

マイカラスにひとつの事件が起こったのは翌日のこと。
奈子は帰ったあとだ。
その日、王宮を訪れたのは、隣国サラートからの使者だった。
使者との会見を終えたハルティは、すぐさま、主だった将軍と大臣たちに緊急の招集をかけた。
王都を留守にしている者以外は、ただちにそれに応えた。
王宮の一室に、国の重鎮たちが一堂に集まる。
ハルティは前置きなしで本題に入った。
「先ほど、サラートから使者が来た。用向きはいつもの通りだ」
それだけで、その場にいる者たちには通じるらしかった。
「また、軍隊が我が国の領内を通行することを認めろ、と？」

将軍のひとりである初老の男が言う。
ハルティはうなずいた。
「連中もしつこいですな。何度も断られているというのに」
そう言うのは、丞相のコアリキキ。
マイカラス王国の西側には、二つの国が国境を接している。
北側がカイザス王国、そして南側がサラート王国である。
この二国は、毎年のように領土を争って戦争を繰り返しているが、なにしろほぼ同じ勢力の国同士の争い、いつも一進一退で、どちらが特に優勢ということもない。
マイカラスとこの二国の間には、嶮しい山脈と広い砂漠が広がっているため、マイカラスは戦には無関係でいられる。
しかしサラートもカイザスもいつの頃からか、マイカラス領内の兵の通行を認めさせて、敵の側面を衝くことを考えるようになっていた。
どちらの国も、一見マイカラスにとって有利と思われる条件を提示して説得を試みるのだが、マイカラスの先王もハルティも、頑として首を縦には振らない。
どちらか一方に加勢することでこの地方の勢力図が変わったら、それは決してマイカラスにとってプラスにはならないとわかっているのだ。
サラートとカイザス、どちらかがもう一方を制圧したら、次はこの国に目を向けることは明白だった。
両国が五分の戦力でいがみあっている現在の状況でこそ、マイカラスがもっとも平和でいられるのだ。
「だが、今回は少し事情が違う」
ハルティは言った。
「サラートは、通行を認めなければ我が国との戦も辞さないと言っている」
その言葉に、一瞬ざわめきが起こる。
「どうせ、はったりでしょう」
大臣のひとりが小さく首を振る。
「サラートには、我が国とカイザスを同時に相手

にするだけの戦力はありません。サラートと我が国が戦争を始めれば、カイザスがこれを好機とサラートに攻め入るのは火を見るより明白なこと」
「ところが、今回のサラートは本気のようだ」
「まさか」
同時に複数の声が上がる。
「ということは、サラートにはどこかもっと大きな国の後ろ盾があるということですな」
ゆっくりとそう言うのは、剣聖の称号を持ち、騎士団で剣術の指南役をしているニウム・ヒロ。
「そこから数千の兵を借り出せれば、サラートはやる気になるかもしれん」
他の者たちは顔を見合わせる。
ニウムの言葉は、たしかにあり得ないことではなかった。
「まず、背後関係を調べる必要がありますな」
「すぐに、新たな間諜をサラートへ送りましょう」
「サラートの侵攻に備え、南部の砦に兵を送らなくては」
「それは、私とダルジィが行きましょう」
そう言ったのはケイウェリだ。
「すぐに用意できる兵力となると、せいぜい二千か……」
コアリキキが難しい表情をする。
マイカラス軍の強さは定評があるが、兵数はけっして多くはなかった。
マイカラスはさほど豊かな国ではなく、そんなに多くの軍人を養う余裕はない。
「敵は少なくともこちらの数倍、苦しい戦いになるぞ」
「なぁに、勝つ必要はないわけですから」
こんな席上でも、ケイウェリの口調は相変わらず気楽だ。
「そう、サラートの最終目的はカイザス王国だ。我が国との戦いに、そうそう時間と兵を割くわけにはいくまい。逆にいえば、我が国へ攻め入るのに手こずるようだと、サラートは作戦の変更を余儀なくされるわけだ」
「我々はカイザスと同盟の交渉をした方がいいで

しょうね。サラートに対する牽制として」
話がまとまるまでに、そう長い時間はかからなかった。
長年、大きな戦は経験していない国とはいえ、そのための備えを忘れたことは一時としてない。
サラートとカイザス、どちらが攻めてきたとしても、その対策は練られている。
やるべき事がまとまり、それぞれの役割分担が決まると、そこにいた者たちは次々と退出していった。
もはや一刻として無駄にはできない。
あとに残ったのは二人。
ハルティとケイウェリだった。
ハルティが引き留めたわけではない。
ケイウェリはなにやら、話がある様子だった。
長い付き合いだからすぐにわかる。
「なにか？」
「ソレア・サハやファーリッジ・ルゥに助力は求めないのですか？」
ハルティはかすかに眉をひそめる。
少し考えて、
「無駄だろう」
そう答える。
「あの二人は、独自の価値観で行動しているようだ。今回は去年とは違う。単なる国同士の争いでしかない。彼女たちは、そういったことには関わらないことで有名だろう？」
「……では、ナコ・ウェルはどうします？　一応彼女も、我が国の騎士でしょう」
一瞬、ハルティの動きが止まる。
無言でケイウェリの顔を見た。
「……いや、ダメだ。知らせてはいけない」
「そうですか」
ケイウェリは意味ありげに笑う。
「……陛下の気持ちは分かりますが……、裏目に出なきゃいいんですけどね」
「どういう意味だ？」
「いえ、別に。では私は、出陣の準備がありますから」
それだけ言うと、ケイウェリは部屋を出ていっ

た。

# 四章　銀砂の戦姫

「やれやれ、なんとも殺風景な土地だな」
男は、忌々しげにつぶやいた。
周囲には、岩と砂ばかりの風景が広がっている。
乾いた風が、灰色の砂を巻き上げる。
ところどころに、乾燥に適応したわずかな植物の茂みがあるだけ。
灰色の乾いた大地を踏みしめて、数千の軍勢が行進していた。
サラート王国の旗印が見てとれる。
周囲の景色に文句をつけているのは、サラート軍の先鋒を指揮する将軍、クレース・ネインだった。
歳の頃は三十代半ば。
マイカラスとの国境であるこの砂漠を除けば、サラートは森の多い豊かな土地だ。
生粋のサラート人であるクレースは、こんな土地には不慣れだった。
文句のひとつも言いたくなるというもの。
しかし、先鋒を任されることは武人の誇りだ。
それがどんな地であろうと、行かねばならない。
彼が現在率いている兵は、約三千五百。
後方の砦には、さらに一万を超える本隊が控えていた。
クレースの任務は、第一にマイカラス領内に橋頭堡を築くこと。
そして機会があればマイカラス軍と一戦を交え、その力量を計ること。
もちろん彼自身は、それだけですますつもりは毛頭なかった。
現段階でマイカラス軍が投入できる戦力は、二千前後と推測されている。
彼の軍だけで、戦力は敵を大きく凌駕しているのだ。
この砂漠でマイカラス軍を撃ち破れば、敵の王都まで一気に侵攻できることは間違いない。
それほどの手柄のチャンスを逃すつもりはなかった。
「将軍……」

隣にいた副官が声をかけてくる。
「うむ、そうだな」
クレースは手の中の地図を見てうなずく。
地図にはこの先、いま進んでいる道を挟むようにして、二つの小さな砦が描かれている。
マイカラス王国の古い砦だ。
近年は使われていなかったはずだが、この戦のために再び手入れをして、サラートの軍勢を待ち受けていたとしても不思議ではない。
このまま無防備に進むのは危険だった。
クレースは進行を止め、二つの砦に斥候を出すように命じる。
しばらくして無事に戻った斥候は、両方の砦に少なくとも数百の兵が配備されていることを報告した。
クレースは考え込む。
砦を無視して前進すれば、左右から挟撃されるのは明らかだ。
片方に戦力を集中して攻めれば、もう一方の軍勢に背後を衝かれるだろう。
かといって、二つの砦を同時に攻めるには少々戦力が足りない。
攻城戦は常に、守り手よりもはるかに多くの寄せ手を必要とする。
「やはり、片方ずつ攻めるしかないか」
「しかしそれでは、もう一方の敵に背後を衝かれるのでは？」
副官の忠告は常識論だが、しかし的確でもあった。
「まあ、そうだろうな。マイカラスの連中がとんでもないマヌケでない限りは。だから、それを逆手に取る」
クレースは含みのある笑いを浮かべた。

＊　＊　＊

クレース率いるサラートの軍勢は、マイカラスの砦のひとつを激しく攻めたてていた。
砦の中の兵力は数百程度と思われるが、それにしては三千を超えるサラート軍に対してよく持ち

こたえている。
「さて、そろそろだと思うが……」
クレースのつぶやきに応えたわけではあるまいが、同時に後方からの知らせが届いた。
砦を攻めるサラート軍の背後に、もう一つの砦から出撃したマイカラスの兵が迫っているというのだ。
それこそ、クレースが待っていたものだった。
すかさず全軍に対して指示を出す。
それまで砦を攻めていた軍勢の過半が、反転して新手の敵に向かう。
残った一部の兵は、砦の軍勢が出撃して背後を衝くのを防ぐ役目だ。
それならば、最小限の戦力を割くだけで事足りる。
これが、クレースの作戦だった。
砦に立てこもっていればこそ何倍もの敵に立ち向かえるが、野戦でこれだけの戦力差となれば、勝敗の行方は見えている。
砦のひとつを攻めるふりをして、もう一方の砦の軍勢を誘い出し、野戦で殲滅する。
そうすれば、背後の心配なしに残った砦も攻め落とせるというものだ。
ここまではまったく思惑どおりに進んでいた。
クレースは、勝利の予感にほくそ笑む。
マイカラスの新手は、最大限に見積もってもせいぜい千騎。
対するこちらは三千近い兵力を割けるのだ。
「意外と、簡単だったな」
隣の副官に向かって笑う。
副官がなにか応えたが、しかしその声は、突如背後でおこった鬨の声にかき消された。
「な、なにごとだ？」
あわてて背後を振り返る。
砦の周囲でなにやら騒ぎが起きている様子だったが、少し距離があるのではっきりとはわからない。
「あれは……」
「将軍、あれは、マイカラスの軍勢です！」
副官が叫ぶ。

間違いなかった。
砦の抑えに残していた軍勢が、マイカラスの騎馬軍団に急襲されている。
それと呼応して、砦の兵も出撃していた。
その兵力を合わせると、砦を包囲していたサラート軍の二倍にはなる。
二倍の敵に、それも不意を衝かれて、サラート軍は総崩れになるところだった。
「なんだと……」
わけがわからないといった様子でつぶやいたクレースは、
「やられたっ！」
かっと目を見開いて叫んだ。
敵を罠にはめたつもりで、いつの間にかこちらが敵の術中に落ちていたのだ。
マイカラス軍は、二つの砦に兵力を分散していると思っていた。
だから、その敵を誘い出して、各個撃破する作戦を考えた。
作戦は成功したはずなのに、実はマイカラス軍は、兵力を三つに分けていたのだ。
二つの砦に配置した兵は、サラート軍をおびき寄せる囮だった。
主力を遊軍として、砦を攻めるサラート軍の背後を衝く作戦だったに違いない。
「くそっ！」
クレースがそれに気付いたときには、あとの祭りだった。
砦の周囲のマイカラス軍は、すでに算を乱して敗走している。
マイカラス軍の新手に向かった主力はまだ無傷とはいえ、ちょうど前後から挟撃される形になっていた。
そしてなにより、マイカラスの新手に主力を差し向けた現在、将軍であるクレースの周囲の護りは、ひどく手薄であった。
砦の周囲を制圧したマイカラスの軍勢が、こちらへ向かってくる。
クレースは馬首をめぐらせた。
とにかく、主力部隊と合流しなければ自分の命

も危ない。
しかし馬を駆けさせようとしたとき、彼の前に一騎の騎馬が現れた。
馬具には、マイカラス王国の紋章が刻まれている。
馬上で長い銀髪を風になびかせたその騎士は、まだ若い女性だった。
「残念ながら、あんたの命はここで終わりだよ。クレース・ネイン」
鋭い瞳で彼を見る。
「何者だ、貴様！」
「将軍、こいつは、ダルジィ・フォア・ハイダーです！　マイカラスの戦姫との異名を持つ騎士……」
「なんだと！」
その言葉が終わる前に、ダルジィが動いた。
クレースと副官の間を、疾風のように駆け抜ける。
一瞬遅れて、副官の身体は馬から落ち、砂の上に赤い染みが広がっていった。
いつの間に抜いたのだろう、ダルジィの手には、やや細身の長い剣が握られている。
ひとすじの赤い液体が、刃の表面を流れ落ちる。
ダルジィは大きく剣を振って、刀身に付いた血糊を飛ばした。
クレースの周囲にいた十騎ほどの騎士たちは、そのときになってようやく反応する。
クレースをかばって、ダルジィの前に立ちふさがった。
ダルジィは手綱を握りなおすと、その中に突っ込んでいく。
信じられない速さだった。
砂と岩であまり足場のよくないこの場所で、まるで整備された馬場にでもいるかのように、華麗に馬を操る。
騎士たちがダルジィを狙って剣を振り下ろしたり、呪文を唱えたりしたときには既に、ダルジィはその側面や背後に回り込んでいた。
細身のその剣が一閃するたびに、サラートの騎士の血しぶきが舞う。

クレースは、信じられないものを見るようにして、呆然と立ちつくしていた。
彼を護っていたのは、みなそれなりに腕の立つ者ばかりである。
それがこんな一方的に。
たったひとりの敵……それも女相手に。
自分の目の前で起きていることとはいえ、にわかには信じられない。
だが、紛れもない現実だった。
マイカラスの戦姫――その異名が伊達ではないと、まざまざと見せつけられた。
ひとまわり以上大きな体躯をした相手の斬撃をいとも簡単に受け流し、返す刀でその相手を両断している。
ダルジィがなまじ美しい顔をしているだけに、体中に返り血を浴びたその姿は、人間のものとは思えなかった。
彼女は口元に笑みすら浮かべている。
凄惨な笑みだった。
戦姫というより、戦鬼とでもいうべきだろう。

「さあ、邪魔者は片付いた。あんたの番だよ」
クレースを護っていた騎士の最後の一人が、馬ごと、どうと音を立てて倒れる。
ダルジィの剣は、騎士の身体のみならず、その馬の首まで深々と切り裂いていた。
他の者はすべて倒れ、クレースと、ダルジィだけがそこに立っている。
これだけの凄まじい闘いをしていながら、ダルジィも、その馬も、うっすらと汗をかいている程度に過ぎない。
クレースは、背筋が凍るような思いがした。
とんでもない相手と、一対一で向かい合っているのだ。
一瞬、逃げることが頭に浮かんだ。
しかしすぐにその考えを捨てる。
砂漠に不慣れな自分と、逆にこの砂漠での馬の扱いを知り尽くしているダルジィとでは、どうあがいたところで逃げ切れるものではない。
だとしたら、残された手はひとつ……。
クレースは剣を抜いた。

生き残るためには、目の前の相手を倒すしかない。
彼も、サラートの騎士として恥ずかしくないだけの実力は持っていた。
いまでこそ実戦で剣を振るう機会など少ないが、若い頃は周囲から一目置かれていたものだ。
ならば、闘った方がよい。
少なくとも、背を向けて逃げるよりは生き残る可能性は高そうだった。
騎士としてのプライドもあった。
そう、こんな小娘に負けるはずがない、と。
クレースは、剣を握る手に力を込めた。
「一応、騎士としての誇りはあるようだな」
薄笑いを浮かべ、ダルジィは剣を水平に構えた。
「いざ、参る！」
一瞬で、ダルジィは間合いを詰める。
クレースがなんの反応もできないうちに、ダルジィの剣が風を切った。
瞬きするほどのわずかな間に、二人の馬はすれ違う。
ギィンッ！
剣と剣がぶつかり合い、火花が散る。
ほとんど奇蹟に近いことだが、クレースはダルジィの剣を受け止めた。
いや、違う。
ダルジィが、わざとクレースが構えた剣を狙って打ち込んだのだ。
キィ……ン
高い音を立てて、クレースの剣が根本から折れた。
柄と、根本少しだけを残して。
クレースの剣は、地面に落ちて突き刺さる。
「ばか……な」
剣の柄を握りしめる手が震えていた。
驚きと、恐怖と、そしてダルジィの斬撃を受け止めたときの衝撃のためだ。
見ているものが、信じられなかった。
彼の剣は、サラートでも指折りの刀匠が鍛えた業物である。
そうやすやすと、刃こぼれすらするものではな

い。
その刃を、まるでチーズでも切るかのようにやすやすと切り落としたのだ。
とてもそんな荒技に耐えられるようには見えない、ダルジィの細身の剣が。
冗談じゃない！
クレースは心の中で叫んだ。
こんな相手と、戦えるはずがない。
折れた剣と一緒に、恥も外聞も捨てて、騎士のプライドもかなぐり捨てて、クレースは逃げ出した。
その背後に、蹄の音が迫る。
かすかな、風を切る音。
背中に鋭い痛みが走った。
しかしそれでも、深手は負わなかったようだ。
馬から転げ落ちそうになりながらも、なんとかたてがみにしがみつき、クレースは馬を走らせた。
後ろを振り返る余裕もない。
しかし、その後はダルジィが追ってくる気配は感じなかった。

「腰抜けが……」
地平線に向かって小さくなってゆくクレースの背中を見ながら、ダルジィが吐き捨てるように言った。
剣に付いた血糊を拭って、鞘に収める。
もう夕方だった。
気温が下がって、風が吹きはじめている。
ダルジィの長い髪が、風にたなびく。
地面に落ちた長い影も揺れている。
その地面に横たわるのは、十人ほどの騎士の骸と、四〜五頭の馬。
運良く無傷だった馬は、どこかへ逃げてしまったようだ。
「ふん……」
ダルジィは小さく鼻を鳴らす。
背後から、蹄の音が近づいてきた。
聞き覚えのある音だ。
だから、いちいち振り向きもしない。

「そっちは、片付いたのか？」
背を向けたまま、まるでひとりごとのように訊く。
「ああ」
背後の人物が応えた。
低い、男の声だ。
「いくら数が多くても、指揮官のいない軍勢など敵じゃない。地の利もこちらにあるしな。何ヶ所かに伏兵を潜ませておいた。簡単な戦いだったな。それよりダルジィ……」
名前を呼ばれて、ようやくダルジィは振り向く。
そこにいるのは、大きな男だった。
その巨体にふさわしい、素晴らしい体躯の馬にまたがっている。
身体にも、馬にも、べっとりと血が付いていた。
しかし、怪我をしている様子はない。
返り血なのだろう。
「どうして、とどめを刺さなかった？」
「あんたが私の立場だったら、あいつを殺したかしら、ケイウェリ？」
逆に聞き返されて、ケイウェリは顎に手を当てる。
答えは考えるまでもない。
「いや、殺さなかっただろうな」
「そうだろう。ああいう無能なヤツは生かしておくに限る。いつか、我が国の役に立つからな」
ケイウェリも、同じ考えだった。
有能な敵なら、殺すか、捕らえるかしなければならない。
しかし、地位に見合った能力を持たない敵は、生かしておいた方がいい。
後任が、それより無能である可能性は低いのだから。
無能な敵は、いってみれば味方と同じだ。
自軍の足を引っ張ることによって、こちらの助けとなってくれる。
「それに……」
ダルジィは言葉を続ける。
「あんな無能な男だって、死ねば悲しむ人間がいるだろう。家族とか、友人とか。私はそんな連中

に恨まれたくはないからな」
「怖い女だな、お前は」
ケイウェリは苦笑した。
ダルジィの真意は、けっして言葉どおりではない。
それはよくわかっている。
クレースはこの場を生き延びたが、だからといって長生きできる保証もなかった。
今日の戦いでのサラートの損害は、軽微なものではないのだから。
生きて国に戻ったところで、敗戦の罪を問われて処刑される可能性も高いだろう。
ダルジィはそれを望んでいるのだ。
彼女が自分の手でクレースを殺していれば、クレースの遺族や友人は、ダルジィと、そしてマイカラス王国を憎むことになる。
だが、国に戻って処刑されたとなると……。
その憎しみのベクトルは、少し違った方向を向く。
つまり、処刑を命じた人物に。
それはすなわち、サラートの国内に不和の種をまくことになる。
ダルジィは、そこまで考えているのだ。
その優れた剣技と激しい気性ばかりが目につくダルジィだが、ただそれだけの人物ではないことを、ケイウェリはよく知っていた。
今回の作戦だって、主にダルジィが考えたものだ。
もっとも、それはケイウェリの考えと大差ないものだったので、彼が口をはさむ必要もなかったのだが。
猛将であり、闘将であり、そして智将である。
なおかつ、最高の剣士でもある。
それが、ダルジィ・フォア・ハイダーだった。
（こういうところは、父親そっくりだよな……）
そう、ケイウェリは思う。
ダルジィの父親、サイラート・フォアも優れた剣技の持ち主だったが、それ以上に、智将として名高かった。
五年ほど前に戦場での怪我がもとで引退したが、

ケイウェリはまだ十代の頃、サイラートについて剣技と戦術を学んでいたのだ。
ダルジィの母親は、優しい、物静かな人だった。だから間違いなく、ダルジィは父親似だった。
「次は誰が来るかな……？」
「ん？」
ダルジィの言葉はひとりごとのように小さなもので、ケイウェリは、それが自分に向けられたものとはすぐに気付かなかった。
「サラートだよ。次は誰を前線に送り込んでくると思う？　まさか、これであきらめはしないだろう」
「ああ、そうだな。俺としてはあきらめて欲しいところだが……まあ、そうもいくまい」
ケイウェリはわざと軽い調子で肩をすくめた。
二人ともわかっている。
戦いはまだ始まったばかりだ。
そして、次の戦いはもっと苦しいものに違いないことを。

＊　＊　＊

サラート軍の対応は、予想以上に素早かった。
すぐさま、新たな将と五千の兵を前線へと送り込んでくる。
サラートの総大将は、けっして無能ではないようだった。
ダルジィたちは囮の部隊を使って敵を誘い出し、兵力を分散させて各個撃破を試みたのだが、相手はそう簡単には乗ってこなかった。
かくして、ケイウェリとダルジィが率いる約二千のマイカラス軍は、約二千五百のサラート軍と、正面から衝突することになったのである。
五百の差とはいえ、マイカラス軍の方がこの砂漠に慣れていることを考えると、戦力はほぼ互角といってもいい。
しかし、これは誤算だった。
もっと、圧倒的に有利な状況を作りだしてから戦端を開くつもりでいたが、今度のサラート軍の指揮官は、そこまで思い通りには行動してくれな

かった。
ほとんど障害物のない、開けた地での野戦。
これでは、伏兵による奇襲も仕掛けようがない。
単純な消耗戦。
それは、ケイウェリとダルジィにとってはいちばん避けたいことだった。
サラート軍は、分散させた残り二千五百の兵の他、後方にはまだ約一万の軍勢が控えている。
たとえ目の前の敵を倒したところで、マイカラス軍の損害が大きければ、残りの敵を抑えることができない。
いまケイウェリとダルジィが敗れれば、マイカラスの王都を護る軍勢は、二千にも満たない。
せめて、王都の備えがもう少し整うまでは、この砂漠でサラート軍を足止めしつづけなければならないのだ。
「やれやれ……まいったな……」
ケイウェリは額の汗を拭いながらつぶやいた。
今のところ、彼の軍勢は互角以上の戦いをつづけていて、大きな損害も出ていないが、しかし素直に喜べる状況ではない。
サラート軍は、待っているのだ。
囮の誘いに乗って分散させてしまった部隊が合流するのを。
そうすれば戦力差は二倍以上になる。
それまで、無理な攻めはせずに守りに徹しているのだろう。
ケイウェリはそう判断する。
彼としては、できればこの場は撤退したかった。
撤退して、もう一度作戦を立て直すべきだろう、と。
そもそも兵数では大きく劣るのだから、まずは策によって圧倒的に有利な状況を作りださない限り、勝利はおぼつかない。
こんな、五分の状況で正面からぶつかり合うような戦いは不本意だった。
一刻も早く、撤退した方がいい。
これ以上損害を出さないうちに。
この戦闘だけを考えれば、勝利を収めることは可能だろう。

しかしサラート軍と違い、マイカラスには十分な予備兵力などないのだ。
相手もそのことはよくわかっているようだった。
積極的に攻めずに守りに徹しているように見えて、しかしマイカラス軍が退こうとすると、そこにつけ込むように攻勢に転じてくる。
これでは、下手に撤退などすれば多大な損害を出すことになってしまう。
「今度の敵将はなかなか切れ者だな、ったく……」
戦況を変えるためには、少しばかり無理をしなければならないかもしれない。
そうケイウェリが考えたとき……。
マイカラス軍の右翼、ダルジィが指揮している軍勢の中に、それまでとは違った動きが見られた。
ケイウェリはすぐに、ダルジィの意図を察する。
「……あの、じゃじゃ馬が！」
しかしその表情は、口調ほどには厳しいものではない。
彼女がやろうとしていることは危険な戦法ではあったが、敵に最大限の損害を与え、自軍の被害を最小にして撤退するにはたしかに効果的だった。
ダルジィがやらなければ、自分で同じことをしていたかもしれない。
少しばかり、彼女の方が短気だったというだけのことだ。
ダルジィの動きを見ていたケイウェリは、少し考えてから新たな指示を部下に伝える。
ダルジィが作りだした新しい状況を最大限に利用し、その上で彼女をサポートしてやらなければならなかった。

ダルジィは麾下の軍勢の指揮を副官に任せると、二百騎ほどを率いて本隊とは別行動をとった。
隊形をくさび形に変え、自らその先頭に立って全速力で敵陣へと突入する。
この捨て身の突撃で、サラート軍の陣形は大きく乱れた。
突撃してきた軍勢を包囲しようとしたのだが、

マイカラス軍の移動速度に対応しきれず、結果として自ら陣形を乱すことになっていた。
その中を、ダルジィに率いられた二百騎の騎士たちが進む。
一瞬たりとも、立ち止まることはない。
速力こそが命だった。
時折、敵が放った魔法が身体をかすめるが、そんなものは気にもとめない。
ダルジィ自身は攻撃魔法を使うことはなく、その魔力のすべてを防御のために費やしていた。
攻撃は剣だけで充分だった。
前に立ちふさがる敵は、一刀のもとに切り捨てる。
ダルジィの剣を受けられる者など、そうそういるものではない。
敵の騎士を切り捨て、歩兵を馬で踏みつぶし、ダルジィは突き進む。
それはまるで、銀色の疾風だった。
風が通りすぎたあとには、赤い血の痕だけが残った。

「……恐ろしい女だな」
サラート軍を指揮する将軍、エカルケ・ヌカルは、半ば呆れたように、そして半ば感心したようにつぶやいた。
彼のところからでも、鬼神のごときダルジィの戦いぶりははっきりと見てとれる。
「このままでは、完全に陣を突破されるぞ。ここまでたどり着くかもしれないな」
「まさか……。いくらなんでもあの小勢で、あんな無茶な突撃がいつまでも続くわけがない」
エカルケよりもかなり年輩の副官が苦笑する。
まだ二十代後半のエカルケの方が、よほど深刻な表情をしていた。
「いや、笑い事ではないぞ。話には聞いていたが、マイカラスの騎士がこれほどのものとは思わなかった。そろそろくい止めないと、我が軍の陣形がずたずたにされてしまう。マイカラス軍が全面攻勢に転じたら、総崩れになるぞ」
エカルケは眉をひそめて言う。
もちろん、あの二百騎の過半は無事に生還する

ことはないだろう。
それを覚悟の上の突撃なのだ。
嫌な相手だな、とエカルケは思う。
単に、捨て身の突撃が嫌なわけではない。
戦はそれだけで勝てるほど簡単なものではない。
ただ無鉄砲な突撃をするだけの相手なら、簡単にあしらう自信がある。
彼は前任のクレース・ネインよりもずっと若いが、知略に関しての評価ははるかに上だった。
無駄死にをする敵は怖くない。
しかし、死に場所を知っていて、そこで命を捨てて闘う相手は怖い。
このマイカラス軍の嫌なところは、犠牲の出し方を知っていることだ。
戦には犠牲はつきもの。
これだけの規模の戦いになれば、どうやったところでまったく犠牲を出さずに済ませることはできない。
マイカラスにとってこの戦は、どんな犠牲を払ってでも勝てばいいというものではない。
後方にはまだサラートの大軍が控えているのだから。
しかし、自軍に犠牲を出したくないからといって、敵が無傷でいるのも困る。
最小限の犠牲で、最大の戦果を挙げること。
犠牲が出るのは仕方ないが、無駄な犠牲は出さないこと。
それが、戦の真髄だ。
その点で、マイカラス軍のこの突撃は、いまの状況下で、最大の戦果を挙げることのできる戦法だった。
（ダルジィ・フォアは、それを計算した上で捨て身の攻撃をしているに違いない……）
エカルケとしては、急いで対策をたてる必要があった。
別働隊との合流を待つために、ゆっくりとしたペースの戦いをつづけていたことが裏目に出ている。
マイカラス軍の急な動きに、兵が対応できていない。

兵数ではこちらが圧倒的に多いのに、それぞれの小隊が連係できずに個別に戦っているため、実質ほとんど同じ兵数での戦いになってしまっている。

それでは、イニシアチブをとっているマイカラス軍の方がはるかに有利だ。

しかも、ダルジィ・フォアが強すぎる。

百や二百といった小勢での戦いでは、ひとりの手練れが戦況を左右する。

サラートの兵の多くは、既に恐怖心にかられているようだった。

「まずいな……」

エカルケにとっては面白くない状況だった。

このままでは、たとえ数にものをいわせてダルジィを倒したところで、兵の間にマイカラスの騎士に対する恐怖心が残るだろう。

それでは、今後の戦に差し支えることになる。

そうならないためには……

「一騎打ちで、勝つしかないな」

独り言のようにつぶやいた。

そうすれば、兵たちは勇気づく。

自軍の騎士がマイカラスの騎士よりも強いとなれば、士気は一気に昂揚する。

今後のために、それはぜひとも必要なことだった。

「将軍、私が行きましょう」

エカルケの傍にいた、一人の騎士が太い声で言った。

ケイウェリにもひけを取らないような大男だ。

「あの小娘をこのままにはしておけん。私が止めてきます」

彼もまた、エカルケと同じことを考えていたのだろう。

エカルケはうなずいた。

「よし。セイコルド、お前に任せる。ダルジィ・フォアさえ倒せば、敵は殲滅できるはずだ」

全力で馬を駆けさせるダルジィの前に、突然、一人の大男が立ちふさがった。

ダルジィの剣が閃く。
鋭い金属音を立てて、二人はすれ違った。
セイコルドは、体躯にふさわしいその大剣で、ダルジィの打ち込みを受け止めていた。
そのまま、剣を振る。
ダルジィの後に続いていたマイカラスの騎士の悲鳴が上がった。
馬を止め、ダルジィが振り返る。
「ほぉ……やるな。貴様たしか……セイコルド・カシュといったか？」
「オレの名を知っているのか、光栄だな。では、オレと勝負してもらおう」
言うなり、セイコルドはダルジィに突っ込んでくる。
大きな、肉厚の刃の剣がうなりを上げた。
ダルジィの剣が、斬撃をを受け止める。
馬をめぐらし、今度はダルジィから斬りかかる。
その巨体に似合わぬ素早い身のこなしで、セイコルドは剣をかわした。
一度お互いに離れて、またぶつかり合う。

二人の剣の間に、火花が散った。
打ち合いが何合も続く。
周囲の誰も、手を出さない。
いや、手を出せずにいる。
サラートの兵も、マイカラスの兵も。
他人の入り込む余地のない、厳しい闘いだった。
息をつく暇さえないような。
二人の放つ闘気に、周囲は圧倒されていた。

もちろん、サラート軍の将エカルケも、この闘いの行方を見守っていた。
「まいったな……」
頭を掻いてつぶやく。
「ダルジィ・フォアがこれほどのものとは……。ちょっと誤算だぞ」
「女の身で、あのセイコルド相手に互角の闘いができるとは……」
彼の副官も、驚いた様子だった。
セイコルド・カシュといえば、サラートでも五

指に入る剣の使い手である。
　その巨体と怪力にものをいわせた打ち込みを、まともに受け止められるものなど国内にはいない。
　それを、あの若い女騎士はやってのけているのだ。
　女性にしては背の高い方だが、それでも平均的な成人男子にも劣る。
　その剣も細身で、一見、華奢なものだ。
　それなのに、セイコルドを相手に一歩も退かずに闘い続けている。
　この目で見ても、にわかに信じられるものではなかった。
「あの剣……王国時代の作だな。でなければ、いくら腕が立つにしても、セイコルドの大剣を受けられるはずがない」
「王国時代の？」
「マイカラスのハイダー家は、トリニアの時代から続く名家だろう。剣の一振りくらい、遺っていてもおかしくはない」
　そして、王国時代から伝わっているのは、剣だけではなかった。
　ダルジィの剣技、現代のものとは少し動きが違う。
　トリニアの時代の騎士剣術だ。
　トリニア王国を最強たらしめた剣技。
　王国時代の末期に築かれ、他国との交流がそれほど多くなかったマイカラスには、まだこうした古い技術や文化が残っているのだった。
「セイコルドが勝っても負けても、すぐに兵を退かせろ」
「何故です？」
　エカルケの指示に、副官は意外そうな声を上げた。
「敗れたときはともかくとして、ダルジィ・フォアを倒せば、マイカラスの兵は浮き足立ちます。一気に叩く好機では？」
「長引きすぎだ。ダルジィ・フォアの背後には、あのケイウェリ・ライが控えている。いくらセイコルドでも、二人続けて勝てる見込みはあるまい」

マイカラス軍の方にいくら目を凝らしても、彼らの位置からでは、最強の将ケイウェリ・ライの姿は見当たらなかった。
ということは逆に、一番いて欲しくない場所にいるに違いないということだ。
「ダルジィ・フォアを倒したところで兵を引けば、今日の戦はこちらの勝ちだ。だが、セイコルドがケイウェリ・ライに敗れれば、引き分けということになってしまう。戦力で劣る相手に引き分けてはいかん」
ダルジィやケイウェリにとってそうであったように、エカルケにとっても今日の戦は不本意だった。
せっかく敵の倍以上の戦力を用意したのに、相手の策にはまって五分の兵数での戦いになってしまった。
途中で敵の企みに気付いたから良かったようなものの、ひとつ間違えばさらに不利な状況に追い込まれるところだったのだ。
相手に主導権を握られた戦は危険だ。
今日のところは一度兵を退き、戦力を集結させたところで再戦を挑むべきだった。
しかしその隙が見いだせずにいるところで、ダルジィのあの突撃である。
セイコルドにダルジィを止めさせて、その隙に撤退するつもりであった。

ダルジィとセイコルドの闘いは、まだ続いている。
二人とも汗ぐっしょりで、致命傷には遠いがいくつかの傷を負っていた。
そしてそれ以上に、馬の方が息を切らせている。
ダルジィは馬から飛び降りた。
「そろそろ、決着をつけようじゃない？」
笑みすら浮かべてそう言うと、汗で額に張り付いた髪をかき上げる。
セイコルドもそれに応え、馬から下りて剣を構えなおした。
「その身体でオレと互角に戦うとは、まったく称

賛に値する。しかし、これで終わりだ！」
全体重を乗せて、セイコルドは剣を振り下ろす。
城の門ですら一撃で破ってしまうのではないかと思われるその打ち込みを、ダルジィは剣で受けながら、身体を開いて相手の剣を受け流し、一歩前に踏み込む。
密着した体勢から、下からすくい上げるように剣を振った
セイコルドが大きく飛び退く。
さらにそれをダルジィが追う。
右から斬りつけると見せかけて、瞬時に剣を左手に持ち替える。
セイコルドは一瞬狼狽したが、それでも辛うじてその打ち込みを受け止めた。
ダルジィの連撃は続く。
もう体力は限界の筈なのに、その動きはいっそう速くなるようだった。
剣を振るたびに、汗と血が滴となって飛び散る。
靴が地面を蹴る音、剣が風を切る音、そして硬い金属のぶつかり合う音だけが響く。
上下左右、めまぐるしく方向を変えて打ち込んでくるダルジィに対し、セイコルドの反応が遅れはじめていた。
自分の不利を感じたセイコルドは、最後の力を振り絞る。
相手の攻撃の一瞬の隙を衝いて、その大剣を大上段から振り下ろした。
しかしその剣先は、深々と地面に突き刺さっただけだ。
ダルジィは一瞬早く相手の懐に飛び込んで、剣を突き上げる。
狙い違わず、その剣はセイコルドの喉を貫いた。
セイコルドの口からあふれた血が、ダルジィの身体を赤く染める。
やがて彼の手から剣が落ち、巨体がゆっくりと崩れた。
重い音を立てて、セイコルドは地面に倒れる。
数瞬の沈黙の後、マイカラスの軍勢から喚声が上がり、同時に、サラート軍に撤退を指示する角笛の音が響き渡った。

金縛りにあったようになっていた兵たちが、再び動き出す。
撤退するサラート軍を、マイカラス軍も積極的に追撃しようとはしなかった。
ケイウェリも、兵を退くタイミングを計っていたのだ。
もう兵の疲労も限界に近いし、間もなく日没だ。
今日の戦はここまでだろう。
ケイウェリは兵に指示を与えながら、セイコルドの骸の傍らに立つダルジィに駆け寄った。
ダルジィは、一歩も動かずにそこに立っていた。
長い影が地面に伸びている。
付き合いの長いケイウェリにはすぐわかった。
もう、まともに動くこともできないくらいに疲れ切っているのだ。
体力の限界を超えた力を、出し尽くしてしまっていた。
本当なら、立っていることすら難しいはずだ。
だが、ダルジィは決して他人に弱みを見せない性格であることを、彼はよく知っていた。

兵たちの見ている前で、疲れ切って地面に座り込むなどできるはずもないのだ。
だからケイウェリは彼女の傍に立つと、目立たぬようにそっとその身体を支えてやる。
「お疲れさん」
小さな声でそう言うと、ようやくダルジィの身体から少し力が抜けたようだった。

## 五章　拒絶

マイカラスとサラートの戦争は、その後膠着状態になっていた。
砂漠の砦でにらみ合いを続け、お互い決定的な攻め手を見いだせないまま、徒に時が過ぎていく。
やがて近隣の国にも、戦の噂は広まっていった。

＊　＊　＊

奈子がその噂を聞いたのは、タルコプの街で、市場へ買い物に来ていたときのこと。
他の街からやってきた行商人と客の間で交わされる会話の中に、奈子の注意を引くいくつかの単語が含まれていた。
マイカラス……戦争……ダルジィ……国王の出陣……。
ソレアに頼まれた、肉とパンの包みを抱えて歩いていた奈子の足が止まる。
顔から、さっと血の気が引いていた。

「ちょっとおじさん！　その話、もっと詳しく聞かせて！」
いきなり現れた少女に襟首をつかまれた行商の男は、わけが分からずに目を白黒させていた。
「おいおい……いったいなんなんだい？」
「いいから、早く、話しなさいよ！」
奈子は、男をつかむ手に力を込める。
「なんなんだよ、いったい……」
男はぶつくさ言いながらも、話をはじめる。
話が進むにしたがって、奈子の表情は徐々に強張っていった。

奈子は、全力疾走でソレアの屋敷へ戻った。
ソレアに頼まれていた買い物はまだ残っていたのだが、いまはそれどころではない。
扉を蹴るように開けて、居間に飛び込む。
「ファージ！　ソレアさん！　大変！　ハルティ様が……」
そう、言いかけて、

しかし最後まで言う前に……。
気付いてしまった。
奈子の方を振り返った、ファージとソレアの表情を見て。
ほんの一瞬見せた、「しまった」という表情を見て。
それで奈子は悟った。
「……」
一度、口を開いてなにか言いかけて、また口を閉じる。
そのまま少し考えて、ようやく言葉を発した。
「……知ってたんだ、二人とも」
考えてみれば当たり前のこと。
予知や千里眼には希有な力を持つソレアと、いつも大陸中を飛び回っているファージ。
隣国で起きている戦のことなど、知らない方がおかしい。
そう、二人は知っていた。
もっと早くから。
もしかしたら、開戦以前から。

なのに、
なのに……
問いかけるような、怒っているような、硬い表情で奈子は言った。
「……二人とも、知ってたんだ。なのに、アタシは知らなかった……」
困惑したような、気まずい表情の二人。
奈子の手から、買い物の荷物が落ちる。
そんなものには一瞥もくれない。
「どうして……？　なぜ、知らせてくれなかったの？」
マイカラスとサラートが開戦した直後くらいにも、奈子はソレアの許を訪れている。
そうでなくとも、ファージはその気になれば、奈子をこちらへ強制的に転移させることもできるのだ。
知らせることはできたはずなのに。
「どうして……」
奈子の問いに、二人は応えない。
「ねぇ、どうして黙ってるの？　ねぇ、すぐにマ

イカラスへ行こうよ！」
ソレアとファージは、ちらと顔を見合わせる。
かすかに、嘆息したようにも見えた。
「ファージ！　ソレアさん！」
「行って、どうするの？」
口を開いたのは、ソレアだった。
普段の優しい口調とは少し違う、いくぶん冷たさを感じさせる声。
機械的な、暖かみのない声。
「どうするって……だって……」
「ナコちゃんが行ってどうするの？　マイカラスはいま、戦争をしているのよ。人を殺せない騎士が、なんの役に立つって？」
ソレアには珍しい、きつい口調だった。
奈子はごくりと唾を飲みこむ。
「……、だって……でも……。アタシは役に立たなくても、ソレアさんやファージがいれば……」
ファージを見る。
彼女は奈子と目を合わせようとしない。
手の中のティーカップを、じっと見おろしていた。
「あのねナコちゃん、私たち……私とファージが、マイカラスを助けなければならない理由はないのよ？」
「そんな……だって、前は……」
助けてくれたじゃない？
その言葉を飲み込む。
「クーデターの時も、レイナ・ディの墓所の時も、あなたを助けただけなの。今回は単なる国同士の争い、関わる気はないわ。私たちみたいに国に属さない魔術師は、できるだけ中立であるべきなのよ。サラートを敵に回す理由はないの」
それだけ一気に言うと、ソレアはティーカップを手に取った。
「それに、マイカラスからはなんの知らせも来ていないわ。つまり、私たちの助力は求めていないということでしょう？」
そう言って、カップを口に運ぶ。
「だって、戦況は芳しくなくて、ハルティ様が自ら出陣するらしいって……」

「興味ないわね」
ひどく、冷たい台詞だ。
普段のソレアからは考えられない。
「もう一度言うわね。マイカラスはいま、戦争をしているのよ。戦争というものがどんなものか、わかっているのかしら」
「わかってる……つもり……だけど……」
奈子は口ごもる。
平和な日本で生まれ育った奈子。
本当にわかっているのかと問われれば、自信はなかった。
「戦争とは、つまり殺し合いよ。もっとも規模の大きな、ね。勝者のいない戦争はあっても、敗者のいない戦争はない。敗北とはすなわち、死。勝利とは、敵を殺すこと。
ナコちゃんは、マイカラスを助けろと言う。それはつまり、サラート王国の兵士を殺せということ。人を殺せない騎士が、私たちに人殺しをしろというの？」
痛烈な皮肉だった。
そして、それは事実だった。
それが現実だった。
奈子は、ぎゅっと唇を噛む。
握った拳が、かすかに震えている。
いつかのソレアの台詞を思い出していた。
『正直言って私は、ナコちゃんがこっちに来るのは反対なの』
マイカラスのクーデター騒ぎが終わった後で、ソレアはそう言った。
『この世界は、決して平和なところではないわ。こちらに来る以上、また、今回みたいな目に遭うかもしれないわよ？』
その通りだった。
まったく、その通りだった。
それは、覚悟の上のはずだった。
なのに、自分の覚悟とやらは、なんと半端なものだったことか。
（結局アタシ……、ソレアさんやファージがいなきゃ、ここではなんの力もないんだ……）
無意識のうちに、頼りきっていた。

ソレアとファージがいれば、マイカラスを救えると思っていた。
それがなにを意味するのかも気付かずに。
「帰りなさい」
ソレアがきっぱりと言う。
「戦争が終わるまで、こっちには来ない方がいいと思うわ」
そんなソレアの言葉に、力なくうなずく。
うなずくしかなかった。
肩を落として、部屋から出ていこうとする奈子の背中に向かって、
「ナコッ！」
いままで無言だったファージが、立ち上がって叫んだ。
奈子がゆっくりと振り返る。
「あ……いや……あの……」
急に口ごもるファージ。
視線をそらす。
奈子の目に、かすかに涙が光っているように見えた。

「仕方ないわね……」
ふぅっと息を吐き出して、ソレアがつぶやいた。
ファージと奈子を交互に見る。
「今回は特別よ。万が一の時には、ハルティ様とアイミィ様の命だけは助けてあげるわ。でも、私たちにそれ以上のことはなにひとつ期待しないでね」
奈子は顔を上げて、ソレアを見た。
かすかにうなずいて、
「ひとつ教えて。この戦争、マイカラスは勝つの？　負けるの？」
そう、問いかける。
「さぁ……」
「わかってるんでしょう？」
「言っとくけど、私の予知の力は百パーセント的中するわけではないわ。すべてを知っているわけではない。それにね……人は、必要以上の未来を知るべきでもない」
ソレアは、それ以上のことを言う気はないらしい。

奈子は、ソレアから回答を引き出すことをあきらめて部屋を出た。
一度、後ろを振り返って、二人をきっと睨みつける。
そうして、叩きつけるように扉を閉めた。

奈子が出ていってしばらくの間、ファージもソレアもただ黙っていた。
ファージは、ソレアを責めるような目つきで睨んでいる。
小さく肩をすくめて、ソレアは言った。
「ファージは、ナコちゃんのこと助けたいんでしょうね？」
「当たり前じゃない！」
「でも、駄目よ。今回はあなたが介入する理由がないもの。許しはもらえないわ」
「わかってるって、うるさいな！」
むっとした表情で怒鳴ると、ファージも部屋を出ていった。
奈子と同じように、扉を乱暴に叩きつけて。

＊　＊　＊

五月初め。
北海道の山もようやく若葉が芽吹く季節。
札幌市南区のはずれ、奏珠別（そうしゅべつ）の街を囲む山々も、鮮やかな若々しい緑に包まれつつあった。
昔、北海道を覆っていた原生林は、明治の開拓期にその多くが切り拓かれ、現在の森林は後の時代に植林されたものだ。
しかしこの一帯は、戦前まで御料林であったために皆伐されることがなく、いまでも原生林が広がっている。
私立白岩学園は、そんな山のふもとにあった。
校舎のすぐ背後まで、森が迫っている。
緑につつまれた、気持ちのいい環境だ。
広い敷地の片隅に、高等部の格技場があった。
本校舎とは、細い渡り廊下でつながっている。
今日、格技場に人の姿はない。

ただ一人を除いて。
奈子は一人きりで稽古を続けていた。
他に誰もいない。
天井から、百キロ以上ありそうなウォーターバッグが吊り下げられている。
それが、奈子の蹴りや突きが打ち込まれるたびに、大きく揺れる。
どれほどの時間、そうしているのだろう。
したたる汗で、板張りの床が濡れていた。
（どうして……）
歯を食いしばって、渾身の突きを叩き込みながら、奈子は考えていた。
どうして、ファージもソレアも、助けてくれないのか。
ソレアの言うこともわからなくもない。
しかし、あまりにも冷たいのではないか。
たしかに、国同士の争いにはファージもソレアも無関係だろう。
だからといって、知らん顔していられるものだろうか。

ハルティやアイミィとは、ソレアやファージだって顔見知りなのに。
いいや、違う。
なにか……
なにか、理由があるのだ。
ソレアはともかく、ファージは普段から他者に対して冷たいところがある。
ときとして、ひどく残酷なところも。
そのことは知っている。
それでも、奈子に対してだけはやさしい。
だから奈子は、安心してファージを頼ることができる。
だけど……
少し前から、感じていることがある。
ファージもソレアも、なにか、奈子に隠していることがある、と。
それはきっと、とても重要なこと。
はっきりと訊いたこともない。
何故かはよくわからないが、訊くのが怖かった。
（どうしてよ……！）

右の中段回し蹴りで、ウォーターバッグは天井まではね上がった。
大きく揺れて戻ってくるところに、高さを微妙に変えた左右の貫手を連続で打ち込む。
公式戦では、禁じ手だった。
目と、喉を狙った貫手。
（ファージのバカ！　いつもなら、アタシの頼みはなんでも聞いてくれるじゃない！）
それが、わがままな、自分勝手な言い分なのはわかっている。
しかし、二人の突然の冷たい態度に、奈子は戸惑っていた。
自分はどうすればいいのか、わからなかった。
どうすればいいのか、いったい何ができるのか。
現実の戦争を前にして、奈子はあまりにも無力だった。
「はぁ……あ」
ため息をつきながら、奈子は床に座り込む。
あたり一面、奈子の汗で濡れていた。
道着も、汗で重く湿っている。

（もぉ……どうすればいいの……）
膝をかかえて、もう一度ため息をついた。
「元気ないね、奈子？」
突然の声にびっくりして、奈子は振り返る。
同時に、シャッターの音がした。
一瞬、青白い光が閃く。
格技場の入口に、一眼レフのカメラを構えた小柄な女生徒が立っていた。
「亜依（あい）……、なにやってんの？」
最初の声だけでわかっていた。
よく知ってる相手だった。
クラスメイトの沢村亜依（あい）。
中学時代からの親友だ。
靴を脱いで格技場に上がり、奈子の近くへとやってくる。
「次号のネタを探しにね。奈子の写真を載せると、女性読者のウケがいいし」
笑いながら、もう一度シャッターを切る。
奈子も慣れっこだった。
亜依は新聞部で、放課後はよくカメラを手に校

内を歩き回っている。
ただし、今日は休日だ。
だから誰もいない。
「ゴールデンウィークだってのにひとりで稽古なんて、ずいぶんと気合いが入ってるね？」
構えていたカメラをおろして、亜依は訊く。
「協会の大会も近いしね。今回はめ～め先輩が中量級でエントリーしてくるっていうし」
「聖陵女子高二年の安藤先輩？　どうして、あの人って中量級どころか、軽量級でもいちばん軽い選手じゃない？」
亜依は意外そうに言った。
め～め先輩こと安藤美夢は、初めて会った相手が驚くほど小柄な少女である。
長いストレートの黒髪を伸ばした姿は、とても、高校女子軽量級で無敗を誇る選手には見えない。
身長百四十六センチ、体重三十キロ強。
奈子たちのクラスでいちばん小柄な亜依よりもさらに小さいのだ。
ちなみに奈子は百六十三センチ、五十三キロある。
「軽量級には、全国でも相手になるのがいないから、つまらないんだとさ」
「まあ、北原先輩が卒業しちゃったし、あの人とまともに闘えるのは奈子くらいか」
「アタシは迷惑だよ。この夏の全国大会は楽勝と思ってたのに」
「それで、この特訓？」
「そゆこと」
うなずく奈子を見て、亜依は意地の悪い笑みを浮かべる。
「奈子って相変わらず、嘘つくのがヘタ」
「ウソって、どーして！」
少しばかりギクリとした様子の奈子だったが、それでもなんとか平静をよそおって訊く。
「私だって、いつも奈子のこと取材してるんだから少しは知ってるよ。目突き、喉突き、関節蹴り、頭部への衝……試合じゃ全部禁じ手じゃない。正攻法じゃ勝てないからって、安藤先輩相手にそんな技つかうつもりじゃないでしょ？」

亜依は笑ってウィンクする。
「奈子ってば、なにか悩んでるみたい」
奈子ははっきりと動揺した。
どうやら、かなり前から稽古の様子を見られていたらしい。
それにしても、由維にも亜依にも、どうして嘘や隠し事は簡単に見抜かれてしまうのだろう。
奈子がその疑問を口にすると、亜依はあっさりと言った。
「そんなの簡単じゃない。あたしも由維ちゃんも、奈子のことが大好きだから。好きな人のことは、なんでもわかるよ」
「好きって……あのね……」
不意うちに狼狽する奈子に、亜依が必要以上に接近してくる。
最近、亜依は妙に積極的だ。
「由維ちゃん、家族旅行で明後日まで留守なんでしょ？　あたしが奈子ン家に行って、由維ちゃんの代わりしてあげる」
上目づかいに、奈子を見上げる。
「か、代わりって、代わりって……なんの……？」
奈子は裏返った声で訊いた。
「炊事、洗濯、掃除。奈子ってば、家事はなにもできないもんね」
「あ……そーゆーこと……」
「あー、奈子ってば、エッチなこと考えてたんだー」
亜依はそう言って、奈子の頬を人差し指でつつく。
「奈子のエッチー」
「そ、そんなんじゃ……」
奈子は真っ赤になって言い繕う。
「いいよ。夜も由維ちゃんの代わりに慰めてあげる。……で、なにを悩んでるの？」
「代わりって、あのね……アタシと由維はまだそんな関係じゃあ……」
「まだ？」
「あ……」
失言だった。

顔が、よりいっそう紅潮する。
「つまり、いずれはそーゆー関係になる予定？」
「いや……その……」
すでに何度か迫ってはいるんです、とは口が裂けても言えない。
「まーまー、そんな照れないで。それより、よかったら話してみてよ。なにを悩んでるの？」
亜依は、大きな目をぱちぱちと瞬く。
そんな亜依を見つめ、奈子は考えながら言った。
「大切な友達がね……とても困った状況に追い込まれていて……助けてあげたいんだけど、アタシじゃなにも力になれないんだ……」
「で、こんなとこで一人でいじけてンの？」
信じらンない、といった表情で亜依が言う。
どちらかというと、奈子を責めるような口振りだ。
「行ってあげればいいじゃない。傍にいれば、なにか力になれることが見つかるかもしれないでしょ。ここでバッグ叩いてて、なにか解決になるの？」
「いじけてるって、そんな……」
「ううん、いじけてる」
言いながら、亜依は奈子の頬に口づけし、腕を身体に回す。
「元気出してよ。あたしが慰めてあ・げ・る」
「それはもういいって！」
道着はおろか、Tシャツの中にまで入り込もうとする亜依の手を押さえて、奈子は叫んだ。

# 六章　暁の戦姫

『お前が男であれば……』

子供の頃から、何度聞かされた台詞だろう。

サイラート・フォア・ハイダーは、マイカラス王国の名家に生まれ、近隣諸国にまでその名を知られた騎士であった。

剣技、魔法技、戦術、いずれにも卓越した能力を持っていて、戦では数えきれない手柄を立てた。

彼に悩みがあるとすれば、ただひとつ。

結婚してから長い間、子供に恵まれなかったことだ。

そして、ようやく授かったただ一人の子は、彼の期待に反して女児であった。

サイラートとしてはやはり、自分の跡を継ぐ息子を望んでいた。

ダルジィと名付けられて成長したその娘が、騎士として優れた能力を持っていたことも、さほど慰めにはならなかった。

一人娘が有能な騎士であればなおのこと「この子が男子であれば」という思いがつのる。

実際のところ、ダルジィの力は並の騎士をはるかに凌駕するものであるにも関わらず、である。

女の身でこれだけの力があれば、男であればさらに……。

考えるまいと思っても、どうしてもそんな考えが頭をよぎるのだった。

そんな父親の思いを知っているためだろう。

ダルジィの性格や立ち振る舞いには、年頃の娘らしいところはほとんど感じられない。

ややきつい顔立ちながら、外見は間違いなく美人であるのだが。

しかし彼女にとって「自分が女であること」は負担以外のなにものでもなかった。

王都からの早馬が前線の砦に着いたのは、真夜中を過ぎた頃だった。

当直の兵を除いて、砦の中は静まり返っている。

知らせを受け取ったのはケイウェリだった。

彼はそのまま、ダルジィの部屋へと向かう。
「オレだ、入るぞ」
扉をノックしたケイウェリは、返事も待たずに中に入った。
戦のためだけに築かれた砦のこと、さほど大きな部屋ではない。
正面にある寝台は空だった。
別に驚きもしない。
いつものことだ。
顔を左に向ける。
いた。
ダルジィは、床に座っていた。
剣を抱いて毛布にくるまり、壁にもたれかかるようにして。
目は閉じているが、眠っていないことはわかっていた。
そもそも、戦の間にダルジィが眠ることがあるのかどうか、ケイウェリには疑問だった。
砦に戻ったときには一応部屋で休むこともあるが、決して横になりはしない。

部屋の中にいるのはせいぜい一～二刻、落ち着いて眠るには短すぎる時間だ。
その間どんな些細な異変があっても、知らせがくる前に部屋から出てくる。
たぶん、わずかな時間うとうととすることはあっても、まともにぐっすりと眠ることはないのだろう。
そんな毎日でよくも体がもつものだと思うが、少なくとも人前では疲れた様子など微塵も見せない。
（張りつめすぎだよな……）
ケイウェリは思うが、いまさら忠告しても無駄なのはわかっている。
身体のために眠った方がいい、などといくら言っても聞きはしない。
優れた騎士であること。
それがダルジィにとってはなによりも優先される。
しかし問題は、そうまでして有能な騎士であり続けるのは、いったい誰のためか、ということ

だった。
ケイウェリが、そんな思いをめぐらせていると、
「どうした？　早馬があったようだが」
ダルジィが目を開ける。
早馬のことまで知っているとは、やはり眠ってはいなかったのだろう。
ダルジィに気づかれない程度に小さく嘆息してから、質問に答えた。
「王都からだ」
「……」
ダルジィの眉がぴくりと動く。
「援軍を送ることが決まった。陛下自ら出陣だ」
言い終わるより先に、ダルジィが飛び起きた。
「なんだとっ？」
ケイウェリに掴みかからんばかりの勢いだ。
「オレに怒るなよ」
ダルジィの怒りをそらすため、わざとのんびりした口調で応える。
「戦線は膠着している。状況を打破するには、可能な限りの戦力を投入するということだろう」
「だからといってなぜ陛下が！　いや、そもそもその兵は、王都の守りに必要なものだろう。援軍など不要、と言ってやれ」
「俺は正直言うと援軍は欲しい。せめてあと千騎あれば……、と何度思ったことか。それはお前も同じだろう？」
「だからといって……陛下を危険にさらすようでは、なんのための騎士だ！　私は、陛下をお守りするためにここにいるんだ！　それなのに……」
ダルジィが唇を噛む。
「どっちにしろ、これはもう決定事項らしい。こっちからなにを言っても、もう間に合わんよ」
「ケイウェリ、貴様、なにを呑気に……」
「そもそも陛下の性格を考えれば、こうなるのは時間の問題だった。あの方は、戦を他の者にまかせて、自分だけ安全な場所にいられはしない。自ら最前線に立つことを……」
「そんなことはさせない！」
鋭い声が、ケイウェリの言葉をさえぎる。
ダルジィの瞳が妖しく光っていた。

「そう、陛下を危険な目に遭わせるわけにはいかん。出陣が止められないのなら……、到着前に、すべてを終わらせればいいだけのこと。すぐに出発の準備だ、敵には気付かれないようにな」
「やれやれ……」
肩をすくめるケイウェリ。
彼は、ダルジィの性格はよく知っている。
ここにくる前から結果は分かっていた。
観念したようにつぶやく。
「……やっぱり、こうなるんだな」
しかしその表情は、どこか楽しそうでもあった。

＊　＊　＊

転移が完了して、見覚えのある男の姿が目に入った瞬間、奈子は床を蹴って高くジャンプしていた。
「なんでっ、あんたがここにいるのよっ！」
空中で一瞬身体を丸め、全身のバネを使って後ろ回し蹴りを叩き込む。
極闘流でもっとも破壊力があるといわれる、飛鷹脚（ひようきやく）と呼ばれる蹴りだ。
顔面にまともに蹴りを食らって、百九十センチ近くある大男の身体が床に転がった。
「よくもっ、アタシのっ、前にっ、顔をっ、出せたっ、ものねっ！」
怒鳴りながら、げしげしと赤毛の頭を踏みつける。
すでに男に意識はない。
「ちょっと、ナコ・ウェル……」
「いいから、止めないでよ！」
背後から伸びてきた手を振り払って、さらに男の背中を踏みつける。
気付いたのはその後だ。
いまの声、聞き覚えがある……と。
後ろを振り返る。
淡い金髪を長く伸ばした、美しい女性が立っていた。
もちろん、よく知っている相手だ。
「フェイリア……どうしてここに？」

「それはどちらかというと、私の台詞ではないかしら」
その女性、フェイリア・ルゥは笑って応える。
フェイリア・ルゥ・ティーナは、大陸でも有数の優れた魔術師だ。
奈子が聖跡へ向かったときに偶然知り合った。
両親と恋人を殺した仇を追って旅を続けているのだという。
だから、こんなところで会うとはまったく予想外だった。
「アタシは一応、この国の騎士だもの。別に、王都にいてもおかしくないっしょ？」
左手首にはめた、騎士の証である銀の腕輪を見せながら奈子は言う。
そう、奈子はいま、マイカラスの王都にいた。
正確には、王宮からそれほど遠くないところにある、ソレアやファージの知り合いの魔術師の家だ。
ここにはソレアやファージが使える、転移のための指標（ポイント）がある。
なにもない場所へ転移するより、はるかに精度が上がるのだ。
王宮内への直接の転移は結界によって妨げられているので、ソレアやファージ、そして奈子がマイカラスを訪れる際は、いつもここを利用していた。
この家の持ち主は、ラムヘメス・サハという三十代後半の魔術師の女性。
奈子も、マイカラスを訪れるたびに会っている。
ソレアやファージ、あるいはフェイリアには劣るにしても、かなりの力を持つという。
「……で、フェイリアはどうして？」
「力のある魔術師は、みな顔見知りみたいなものだもの、私がここにいても不思議ではないでしょう。マイカラスで戦争が起こったと聞いて、あなたのことがちょっと気になってね。それより……」
フェイリアは奈子の足下を指差した。
「どうしたの、それ……？」
奈子の足の下で、エイシス・コットがつぶれた

カエルのような格好でのびている。
「どうしたもこうしたもないよ！　こいつってば……」
言いかけて、奈子は口をつぐむ。
エイシスは、フェイリアの魔法の弟子であり、恋人……ではないにしても、それに近い関係であるはずだった。
それを考えると、言わない方がいいのかもしれない。
一月ほど前、奈子がエイシスになにをされたのか……。
フェイリアに告白するのは少々ためらわれた。
「いや……あの……つまり……ね」
頬を赤くして言いよどむ。
それだけで、フェイリアは理解したようだった。
「ふぅん……。まあ、なんとなく見当はつくけど」
意味深に笑う。
エイシスとの付き合いは長い彼女のこと、この男の性格はよくわかっているのだろう。

「気持ちは分からなくもないけど、そのくらいにしておいてくれない？　だいたいあなた、そんなことのためにマイカラスまで来たわけではないのでしょう？」
「あ……」
そう言われて、ようやく奈子はエイシスの背中から足をどけた。
とりあえず、今日のところはこのくらいで勘弁してやってもいいだろう、と。
「そう、別にこのバカの相手をするために来たわけじゃないんだ。でも……」
奈子はためらいがちに言った。
「いったいどうしたらいいのか、わからないんだ……」
ラムヘメスがお茶を出してくれたので、奈子は席について話し始めた。
先日の、ソレアやファージとのやりとりについて。
奈子の話が終わるまで、フェイリアは黙って聞いていた。

「そりゃあ、ソレアやファージに頼りきっていたアタシも悪いけど、冷たいと思わない？」
しかしフェイリアは、その意見に同意しなかった。
「でも、あの人たちの立場上、それは仕方ないんじゃないの？」
「仕方ない？　ソレアやファージの立場って……？　フェイリア、あの二人のことよく知ってるの？」
考えてみれば……、
奈子は実のところ、ファージやソレアのことはなにも知らないに等しい。
生まれも、経歴も。
ソレアは占い師として広く知られているが、ファージにいたってはどうやって生計をたてているのかすら知らない。
ソレアの家にいないとき、ファージがどこでなにをしているのかも。
訊いてみたことがないわけではない。
しかし曖昧にごまかすだけで、答えてはくれない。
聖跡の一件以来、それを訊くのもなんだかためらわれた。
なにか、訊いてはいけないことがあるらしい、と。
「知ってるもなにも……あの二人は有名人だもの。ナコこそ、あの人たちと親しいんじゃないの？」
「親しいといえば親しいかもしれないけど……、知り合ってから一年とたってないし、それ以前のことはほとんどなにも知らないんだ」
「ふぅん……ナコには、隠しているのかしらね」
フェイリアは考えるような表情になった。
人差し指を顎に当てて、天井を見上げるそぶりをする。
「フェイリアはファージたちと親しいの？　ね、知ってることを教えて？」
「意図的に隠してるとなると、私が言っていいのかしら……」
言葉を切って、ティーカップを口に運ぶ。
ゆっくりとカップを置くと、まっすぐに奈子を

見た。
意味ありげな笑みを浮かべて。
「私も、それほど多くを知ってるわけではないわ。あの二人とは親しいどころか、むしろ敵……だもの」
喉の奥でくすくすと笑う。
「敵？　どうして？」
「それは……、あの二人が『墓守』だから」
「墓守？」
奈子は訊き返す。
聞き慣れない言葉だった。
言葉の通りに解釈すれば、墓を守る者。
それで奈子が思い出すのは、竜騎士エモン・レーナの墓所を護る番人、クレイン・ファ・トームのこと。
「王国時代の遺跡を発掘し、失われた技と知識を得ることは、誰もが望むこと。でも、実際にそれがうまくいくことは少ないわ」
「どうして？」
「これまで発掘の手が及んでいない遺跡を見つけるのが難しい。強力な魔法で封印されていて、手を出せないことも多い。発掘してみても、役にたつものが見つかるとは限らない」
フェイリアは指を折って、ひとつひとつ数え上げる。
「運良く、王国時代のすばらしい品を見つけたとするでしょ、竜騎士の剣とか、高位魔法について書かれた魔道書とか……」
うなずく奈子。
「すると、どこからともなく、鮮やかな金髪と珍しい金色の瞳をもった魔術師が現れるの。そこにいる者を皆殺しにし、遺跡を封印して立ち去るわけ」
冗談めかした言い方だったが、奈子の顔がさぁっと青ざめる。
金髪、金瞳の魔術師とは誰のことか、もちろんすぐにわかった。
墓守……とはそういう意味か。
「ファージが……？」
奈子の声は震えて、かすれていた。

フェイリアは表情だけで肯定してみせる。
「どうして、そんなことを……」
「どうして……か。それがわかればね……」
カップに手を伸ばしかけて途中で思いとどまり、指でテーブルをコツ、コツ、と叩く。
「ここからは、伝説の範疇になるんだけど……」
わずかにうつむいてテーブルを見つめていたフェイリアは、そう言って顔を上げた。
「いまから千年前……最後の戦争で、トリニアとストレインが滅びへの道を歩んでいた時代……」

その時代、魔法技術の進歩は頂点に達していた。
竜に匹敵する戦闘力を持った人造の魔物が大地を焦土と化し、竜騎士の魔法は大都市をも一瞬で廃墟に変えた。
死者の数は生者を上まわり、戦争の余波は、この世界の気候にすら多大な影響を与えていた。
このままでは、この星そのものが滅びてしまうのではないか……なんとか生き延びた人々の胸には、そんな思いがあった。
すべては、人間が強力すぎる力を手にしたことから始まったのだ。
当時の認識としては、魔法そのものは何百万年という生物の進化の歴史の中で生まれたものと考えられていた。
しかし、竜騎士の力は違う。
竜騎士の力は『神々』から与えられたもので、人間の分を越えた力だと。
そう考える人たちがいた。
大戦で大国は滅び、竜騎士も高位の魔術師も多くが命を落とした。
このまま、『大いなる力』は歴史の中に埋もれさせてしまえばいいと、そう考えた人たちがいた。
これは、人間の手に余る力なのだ、と。
幸か不幸か、もう竜騎士の力とその知識を持った人間は、ほとんど生き残ってはいない。
あとは、後世の人間が、この時代の遺跡から見つけてはいけないものを見つけださないように監視すればよい。

未来永劫にわたって、その任につく人間が必要だった。
そのために必要な力を持ちながら、決して、それ以外の目的には力を用いない人間が。
ごくわずかな人間を、生まれたときからそのために教育する必要があった。
そして、その役目を代々伝えていかなければならない。
世界を滅ぼす力がよみがえらないために――

「……本当にそんな人たちが存在するのかどうか、疑問視する声も多いけどね。」
話し終わって、フェイリアはお茶を一口すする。
「でもまあ、そんな言い伝えがあるのは事実。そして、ファーリッジ・ルゥが発掘現場を襲っていることもね。別に、墓所だけに限らないんだけど、いつの頃からか『墓守』と呼ばれている訳よ」
奈子も自分のカップに手を伸ばした。
顔は蒼白で、その手が震えている。

「墓守は、現在では失われた力の一部を受け継いでいる。だけど、その力は自由に使えるわけではないわ。王国時代の力を封印するため……それ以外の目的に力を用いることは許されてはいない」
「だから……なの？」
「そう、たとえナコの頼みでも、マイカラスとサラートの戦には介入できないのよ」
その言葉で奈子は、最後に会ったときのファージの表情を思い出した。
きっとファージもソレアも、好きこのんで奈子に冷たく当たったのではあるまい。
彼女たちの立場上、そうするしかなかったのだ。
「墓守……か……」
まだ、少し頭が混乱していた。
ゆっくりと、頭の中を整理する。
確かに、それでいくつかの疑問が解決する。
どうしてファージが、あんなにも王国時代の遺跡に執着するのか。
どうしてソレアは、聖跡へ行った奈子を咎めたのか。

考えてみれば、ソレアと初めて会ったとき、彼女は言っていたではないか。
『たとえ何千年経っても、ランドゥの力を利用しようとするものがいる限り、ファレイアの名を頂く私達には、それを阻止しなければならない義務があります……』
あのときはなにを言っているのか、よくわからなかった。
でも、いまならいくらか理解できる。
この話を聞いたあとならば。
「それで、フェイリアにとっては、敵になるわけか……」
「そーゆーこと」
フェイリアが旅を続けている理由は、ひとつは仇を捜すため、もう一つは、仇を倒すための『力』を手に入れるためだった。
力……すなわち、失われた王国時代の魔法だ。
「とにかく、ファージたちに頼るわけにはいかないことは、はっきりしたわけだ……」
奈子はあきらめたように言った。
実はまだ、心のどこかで期待していたのだ。
「これから、どうしたらいいのかな……」
また、わからなくなってしまった。
とりあえずマイカラスへ来てはみたものの、このあとどうすればいいのだろう。
噂では、近日中にハルティ自ら兵を率いて出陣するという。
それに同行することはできるかもしれない。
しかしそうしたところで、たいした力にはなれないだろう。
一対一の白兵戦にはそれなりに自信もあるが、これは、何千何万という軍勢がぶつかり合う戦争なのだ。
いったい、高校生になったばかりの女の子が、一国の勝利のためになにができるというのだろう。
「そんなの簡単だろう？」
背後から声がした。
同時に、大きな手が奈子の肩に置かれる。
「そーゆーときは俺に言えよ。俺がいれば千人力。なにしろアルトゥル王国の精鋭軍団を相手に、一

人で戦った強者だぜ？」
相変わらず、人を小馬鹿にしたような笑みを浮かべてエイシスが言う。
その顔には、真新しいあざがいくつも残っていた。
「あんたを雇うと高くつくからヤダ」
奈子はエイシスの顔も見ずに、間髪入れず断る。
「いまさら、お前から金なんか取らねーって」
「その代わり、身体で払えってゆーんでしょ？」
「わかってるなら話は早い」
奈子は、肩に置かれたエイシスの手の小指と薬指を無言で握ると、手の甲の側へ力一杯に曲げた。
エイシスが悲鳴を上げる。
「ねぇフェイリア、どうしてこんなバカと一緒にいるの？」
呆れ顔でこのやりとりを見ていたフェイリアに訊く。
「まあとりあえず、腕が立つのは確かだから……。どうする？　こんなバカでも連れていけば戦力にはなるわよ」
フェイリアも、「こんなバカ」発言を否定する気はないようだった。
きっといろいろと、苦労させられているのだろう。
「いらない、こいつに借りをつくったらあとが怖いし。それに、もうわかったからいいんだ」
「わかったって？」
「アタシにできること。アタシの力でも、マイカラスを救えるかもしれないってこと。このバカが教えてくれた」
「エイシスが……？」
フェイリアは不思議そうに、まだ指を押さえてうずくまっているエイシスを見る。
「なるほど、そういうこと。でも、ずいぶんと大胆なこと考えるのね。かなり危険だし、難しいわよ？」
少し考えて、ぽんと手を叩いた。
「危険なのはわかってる。安全に勝てる戦争なんてないさ。でも、フェイリアにひとつ頼みがあるんだけど……」

「なに？　私にできることなら力になるけど」
「アタシを、戦場まで連れていってくれない？　フェイリアは、転移魔法が使えるんでしょ？」
奈子が立ち上がる。
その目には、ここ何日か失われていた、強い光が戻っていた。
「戦場……そう、あなたの戦場、ね。いいわ、手伝ってあげる」
二人は立ち上がって、部屋から出ていく。
「おいおい、今回は俺の出番なしかよ……」
ひとり取り残されたエイシスが、ぽつりとつぶやいた。

＊　＊　＊

今日は一日、出陣の準備のためにマイカラスの王宮は大変な騒ぎだった。
深夜になって、ハルティはようやく自分の寝室へ戻った。
扉を閉めて、そこではじめて、室内に自分以外の人間がいることに気付く。
一瞬警戒の色を浮かべた顔は、相手が誰か気付いて笑顔を浮かべる。
しかしすぐに、それは疑問の表情に変わった。
「ナコさん……？　なぜここに？」
この問いには、二つの意味があった。
ひとつは、どうやってここまで入ってきたのかということ。
王宮には外部からの転移を阻止する結界が張られていて、まず侵入は不可能だ。
奈子なら城門を顔パスで通れるが、その場合はすぐにハルティのところに知らせがくる。
そしてもうひとつ……こちらの方がより重要なのだが、いったい何をしに来たのか、ということ。
奈子の表情を見ただけで、おおよその見当はついた。
まっすぐにハルティを見つめている。
普段見せることのない表情だった。
怒っているような、そして彼を責めているような。

それでいてなお、どこか、泣いているような。
そんな表情だった。
「なぜ……？」
奈子はゆっくりと言った。
「それは、アタシの台詞だと思います」
感情を押し殺した、抑揚のない声だった。。
「なぜ、知らせてくれなかったんですか？」
その言葉で、ハルティは自分の過ちを悟った。
戦のことを奈子やソレアに知らせないのか、とケイウェリに訊かれたとき、彼は首を横に振ったのだ。
知らせてはいけない、と。
奈子のためを思って言ったつもりだった。
しかし、それは誤りだった。
ケイウェリが言った「裏目に出なきゃいいんですけどね」とは、このことだったのだ。
奈子は間違いなく、ハルティに対して怒っていた。
すぅ、と息を吸い込んで、また口を開く。
「アタシは、マイカラスの騎士ではないんですか？　どうして、知らせてくれなかったんですか？」
理由は簡単だ。
奈子が人を殺せないから。
戦争とは結局、人の殺し合いだ。
奈子のためを思ってのことだった。
一流の騎士に匹敵する力を持っていても、奈子の心は軍人のものではない。
以前、ファージの仇を殺したときの姿を見ているハルティは、これ以上奈子を傷つけたくなかったのだ。
しかし奈子の性格を考えれば、そんな気遣いは不本意だろう。
少し考えればわかることだった。
いや、わかってはいた。
わかってはいたが、それでもやはり、奈子を巻き込みたくはなかった。
もう、手遅れだったが……。
ハルティはもう一度奈子の顔を見て、その目にうっすらと涙を浮かべているのに気がついた。

「ナコさん……」
「アタシは……、アタシだって、戦えます。そのために身につけた力です。大切なものを守るために……」
大切なもの。
ハルティやアイミィ、その他のマイカラスの知り合い。
そして、奈子自身の誇り。
どこにでもいるただの十五歳の娘とは違う。
ここにいるのは、戦うための牙と爪を持った、美しき獣だった。
「だから、アタシはここに来ました。アタシが、アタシであるためには、戦うしかないんです」
「ナコさん……」
涙を流さずに、それでも奈子は泣いていた。
それを見て、ハルティも考えを改めた。
奈子に向かって手を差し出す。
「出陣は、明後日の朝です。私と一緒に来ていただけますか」
奈子は首を振った。
驚いたことに、首を横に振ったのだ。
ハルティは怪訝そうな顔をする。
奈子はそのために来たのではないのか、と。
「ハルティ様は、出陣する必要はありません。明日にはすべて終わります」
「なんだって？」
一瞬、自分の耳を疑った。
数回、目を瞬いて、奈子の台詞の意味を考える。
「アタシは、いま、ここにいます。これが、答えです」
「あなたは……ひどく危険なことを考えてはいませんか？　ファーリッジ・ルゥが一緒なのですか？」
そうであって欲しい、と切に願った。
奈子がなにをしようとしているか、おおよそ見当はつく。
あまりにも無茶な企みだった。
いま、ここにいる、それが答えだ……と奈子は言った。
マイカラス王宮の結界は、外部から侵入するこ

とが可能だ。
王宮の結界が破れるならば、サラートの砦の結界だって破れる。
現実に、それを証明して見せた。
奈子は、サラートの本隊が布陣している後方の砦に潜入し、全軍を指揮している将軍を暗殺しようとしているに違いなかった。
後方でいきなりそんな事件が起きれば、ダルジィたちと交戦中の部隊も引き返すしかあるまい。
双方の犠牲をもっとも少なく、戦争を終わらせる方法がこれだった。
ただしそれは、実行する者にとってはもっとも危険な策であった。
それでも、あの稀代の魔術師ファーリッジ・ルゥが一緒ならば最悪の事態は避けられるだろう。
ハルティはそう考える。
しかし、恐れていたことではあったが、奈子はそれを否定した。
転移には他の魔術師の力を借りるが、砦に侵入するのは自分ひとりだ、と。

「冗談じゃない！」
ハルティは叫ぶ。
「ナコさんに、そんな危険なことをさせるわけにはいきません！」
「いくら言っても、もう手遅れですよ」
奈子は、かすかな笑みを浮かべた。
「アタシは、これから行きます。ハルティ様がどんなに出陣を急いでも、明日の午後が精一杯でしょう。前線に着くのはそれから何日後になります？」
「でも、力ずくで止めることはできます」
ハルティは奈子の腕をつかんだ。
そしてそのまま、奈子の身体を力一杯抱きしめる。
「あなたひとりでそんな危険なこと、やめてください。せめて、行くなら私たちと一緒に……、お願いです」
奈子はわずかに頬を赤らめ、いくぶん緊張した面持ちでじっとしていた。
「私は、あなたを一人で行かせるわけにはいきま

せん。あなたがうんと言わない限り、この手は放しません」
「ごめんなさい……でも、行かせてください。これは、アタシのけじめなんです」
ハルティの腕の中で、奈子はやっと聞こえるくらいの小さな声で言った。
「心配しなくても、大丈夫ですよ。絶対に生きて帰りますから。約束します。アタシ、この約束を破ったことはいままで一度もありませんよ？」
奈子はわざと明るく言う。
ハルティもつられて、口元をほころばせた。
「誰だって、その約束は一生に一度しか破れませんよ」
「アタシのこと、信じてくれないんですか？」
「信じてます。信じてますけど……だけど……」
「じゃあ、吉報を待っていてください。あ、戦勝祝いの宴の用意もしておいてくださいね」
それだけ言うと、奈子もハルティの身体に腕を回した。
互いの鼓動を感じるほどに、身体が密着する。
しばらく、そのまま黙っていた。
互いの鼓動と、呼吸と、体温を感じながら。
「ナコさん……」
ハルティはそっと、奈子と唇を重ねた。
奈子もまったく抗うそぶりを見せず、それを受け入れる。
しっかりと抱き合って、
相手の存在を肌で感じて、
二人は、長い長い口づけを交わしていた。

＊　＊　＊

「人を待たせておいて、いつまでもいちゃついてないでよね」
フェイリアは口では文句を言ったが、顔は笑っていた。
「あーあ、若いっていいわねー、情熱的で」
「また、そういう年寄りくさいことを……」
そう言いかけたところで、奈子は思いっきり髪を引っ張られる。

「なにか言った？」
「い……いたた……なにも言ってないって！」
フェイリアは、年齢の話題にはやたらと敏感に反応する。
外見は二十代半ばでしかないが、奈子の計算では、実年齢はそれより十歳近く上のはずだった。
ソレアもそうだが、力のある魔術師の女性は、実際よりもずっと若く見える。
別に魔術師がそういう体質なのではなくて、単に、魔法の力で外見的な若さを保っているというだけの話だ。
いつまでも若く美しくありたいというのは、どこの世界でも女性に共通する願いなのだろう。
「けど、これって玉の輿よね、ナコ？」
フェイリアは目を輝かせている。
「玉の輿って、そんな……」
「ハルティ・ウェルってなかなかいい男よ。小国とはいえ仮にも一国の王なわけだし……。これってチャンスじゃない？」
「あのね……」
フェイリアの表情、どう見ても面白がっているようにしか見えない。
「別に、そんなんじゃないの！」
からかわれて、奈子は頬をふくらませる。
「あーあ、私があと十歳若ければ、ナコなんかには負けないのになー」
「フェイリアが十歳若くても、ハルティ様より年上だよ？」
当然の事ながら、そう口にしたとたん、奈子は力いっぱい叩かれた。

＊　＊　＊

「着いたわ。目的地はあの砦よ」
フェイリアが指差す先を、奈子も見た。
まだ、夜は明けていない。
東の空が、かすかに、白みはじめているかどうかというところ。
しかし、少し離れたところからでも、砦の位置は一目でわかった。

「な、なに……あれ？」
砦のあちこちで、火の手が上がっていた。
その炎が、周囲の軍勢を照らしている。
「マイカラス軍のようね」
しばらく様子を観察して、フェイリアは言う。
「マイカラス軍？　どうして？　ここは戦場からずっと後方じゃないの？」
ここは、サラートとマイカラスの国境から、わずかにマイカラス領へ入ったところ。
この砦はもともとマイカラスのものなのだが、ここでは守るに不利ということで、砦に駐留していた少数の兵は早々に撤退し、ダルジィたちの軍勢と合流している。
空になった砦をサラート軍が占拠して、本陣として使用しているのだ。
だから、実際の戦場はもっとマイカラス領に深く入ったところのはずだった。
「ナコと同じことを考える人間がいたんでしょう」
「じゃあ……まさか……」
「砦の外の軍勢は囮、サラート軍の注意を引きつけているだけよ。よく見て、右手の城壁が崩れているでしょう？　あそこから少数の部隊を侵入させたのでしょう」
フェイリアの言うとおりだった。
外のマイカラス軍は、城壁が崩れている箇所の反対側から激しく砦を攻撃している。
「……砦って、そんな簡単に侵入できるものなの？」
「ここはもともとマイカラスの砦だからね。マイカラス軍はこんな時のために、敵には気付かれないような攻め口を用意してあるって聞いたことがあるわ」
「え……」
奈子は言葉を失う。
なんと周到なことだろう。
砦そのものが罠になっているとは。
他国に対して兵力で劣るマイカラスの、苦肉の策なのだろう。
「でも……砦の中には、かなりの軍勢がいるんで

しょ？」
「少なく見積もって、六～七千くらいかしら。マイカラス軍はせいぜい二千。砦に侵入したのは二百に満たないわね」
「そんな無茶な！」
「一人で行こうとしているナコに比べたら、ずっとましじゃない？」
奈子は思わず大声を上げたが、フェイリアは平然としている。
「考えることはみな同じよ。兵力に圧倒的な差がある場合、まともに戦っては勝ち目はない。じゃあどうする？　少数の精鋭でもって敵の中枢を叩くのが、いちばん単純で、しかも確率の高い方法よね」
フェイリアの言葉に、奈子はゆっくりとうなずく。
六年前、ハシュハルドの街が大国アルトゥルに攻められたとき。
エイシスが使った手がそれだった。
奈子も以前、エイシスからその話は聞いていた。
エイシスの顔を見て、そのことを思い出した。
いま、奈子にできることもそれしかない。
もちろん、奈子ひとりの力では無理だ。
強力な結界を破って転移を行えるフェイリアがいてこそ可能なことだった。
「ね、この戦闘……」
砦の周囲の戦闘の様子を見ていた奈子は、不安げにつぶやいた。
「マイカラスが勝つ可能性は、どのくらい？」
「一割もないでしょう」
あっさりと答えるフェイリア。
奈子が息をのむ。
「いくら屋内の戦闘とはいえ、彼我の兵数の差が十倍以上あってはね……。ダルジィ・フォアをはじめ、マイカラスの騎士が強いとはいっても、人間の体力には限界があるもの」
「じゃあ……、じゃあ、そんな勝つ見込みのない戦いをしているの？」
「それでも、いまの時点ではもっとも勝率の高い方法でしょう。ハルティ王の援軍が合流すればま

た話は変わるけど、彼らはみな、自分たちの国王が戦場に立つ危険は避けたいと思っているわ。たとえ自分たちが死んでも、アイサール王家がある限りマイカラスは滅びないもの」

奈子はじっと、砦を見つめた。

あちこちで上がる火の手。

激しい戦いを続けている兵士たち。

このままでは、双方に多大な犠牲が出るだろう。

「あの人たちを止められない？　無駄死にする必要はないわ」

これから、自分が行くのだから、他の者達が血を流す必要はない。

そう奈子は考えた。

しかし、フェイリアは首を横に振る。

「なにをもって無駄死にというのかしら。彼らもそれぞれ、大切なものを護るために戦っている。祖国、家族、恋人や友人のために。戦わずにすむならそれに越したことはないのかもしれないけど、戦うことでしか得られないものもあるわ」

「フェイリア……」

「戦うべきよ。本当に大切なものは、戦って勝ち取るべきだわ。何億年も昔、私たちの祖先が目に見えないくらいの微生物だった時代から、そうしてきたんだもの」

「……」

奈子は、すぐには答えられなかった。

どうなのだろう？

争うこと、戦うことがイコール悪という雰囲気のある日本で育った奈子には、すぐには答えられなかった。

そう、理性では答えられない。

だけど……

相応の代償を払わなければ、手に入れられないものもある。

奈子は、ぎゅっと拳を握った。

戦え――と。

魂がそう叫んでいる。

＊　＊　＊

マイカラスの兵は、いくつかに分かれて砦の内部への進入を果たしていた。
そのうちの一隊を、ダルジィが率いている。
ここには、ケイウェリの姿はない。
彼は、外の軍勢の指揮を執っている。
そうさせたのはダルジィだ。
たしかに、マイカラス最強の騎士といわれるケイウェリもいれば、この奇襲の成功率はいくらか上がるだろう。
しかしそれでも、きわめて分の悪い賭けには違いなかった。
だとしたら、ダルジィとケイウェリの二人ともが突入部隊に加わることはできない。
どちらか一人でも生き残っていれば、マイカラス軍の全面敗走は避けられる。
まだ戦は続けられるのだ。
もちろんケイウェリも自分が行くと言いはったが、ダルジィは頑として譲らなかった。
彼女にとって、これだけはなんとしても譲れなかったのだ。

「ちっ、新手か」
ダルジィは小さく舌打ちする。
前方の廊下に、敵兵の姿が見えた。
ここに来るまでに、どれだけの敵を倒してきたか。
もう数え切れない。
しかしそれでも、目的地はまだ先だった。
「オカラスヌ・ウェィテ・アパニク・ネ！」
剣をかざし、ダルジィが呪文を唱えた。
前方の敵兵の真ん中に、明るいオレンジ色の光球が現れる。
次の瞬間、敵兵が炎に包まれた。
悲鳴は、爆発音にかき消される。
爆風が廊下を駆け抜ける。
ダルジィは立ち止まらず、廊下を覆う硝煙の中に飛び込んだ
剣が閃く。

対魔防御の間に合った敵が、剣の餌食となって悲鳴を上げる。
ひとり、ふたり。
三人目に向かったところで、魔法の矢が肩をかすめた。
さらに新手が出現していた。
ダルジィは身を低くして駆けだす。
後方から、部下たちが援護の魔法を放つ。
敵味方の魔法の炎が飛び交う中を一瞬で駆け抜け、剣を振った。
血しぶきが顔にかかる。
正面の敵兵を剣で貫きながら、左手で短剣を投げる。
側面から斬りかかろうとしていた敵が、喉に短剣を受けて倒れた。
敵の足並みが乱れたところに、後続の味方が襲いかかる。
ダルジィにしてみれば、こんなところでいつまでも手間取っているわけにいかないのだ。
目的はただひとつ。
マイカラスへ侵攻したサラート軍の総大将、オルウヌ・ムカルの首だ。
それ以外の相手は眼中にない。
さらに先へ進もうとする。
その背後に突然、大きな人影が現れた。
剣がうなりを上げる。
ダルジィは前に倒れ込むようにして床を転がる。
背中に、灼けるような痛みが走った。
床に倒れたまま、短剣を投げる。
背後に現れた巨漢の敵兵は、それを自分の剣ではじき飛ばした。
その隙にダルジィは立ち上がる。
受けた傷の痛みなど、気にしている場合ではない。
まだ立ち上がって、闘うことができる。
それで十分だ。
剣を構える。
二人の剣が、火花を散らして激しくぶつかり合った。
ギリ……

刃が擦れあって、耳障りな音をたてる。
お互い、渾身の力で剣を押す。
びくともしない。
二人の腕が、ぶるぶると震えている。
互角の力比べだった。
ダルジィは、自分よりもふたまわり以上大きな身体をした敵を相手にしているのに。
敵は、見るからに力自慢の男。
女相手に力で勝てないことが信じられないのか、必死の形相で、さらに力で押してくる。
と突然、押し合っている相手が消えた。
男の目からは、そう見えた。
当然の結果として、男は前につんのめる。
あれだけの力で押し合っていた状態で、いきなり横へ身をかわしたなどとは信じられない。
そんな表情を浮かべたまま、男は倒れる。
ダルジィの剣が、その胴を深々と切り裂いていた。

＊　＊　＊

「かなり強引な転移になるから、衝撃に備えてね」
フェイリアは言った。
マイカラスの王宮へ転移したときは、じっくりと結界の隙を探し、抜け道をつくる余裕があった。
時間的にも余裕があったし、マイカラスの結界の癖がわかっていたからできたことだ。
今回はそうはいかない。
勝負は一瞬だ。
力ずくで結界を破り、奈子を転移させなければならない。
「わかってる、大丈夫。それより、フェイリアは手出ししないでね。これはアタシの戦いなんだから」
「わかってるわよ。私は本来、無関係なんですからね。無駄な殺生をする気はないわ」
フェイリアの手に、オルディカの樹で作った魔術師の杖が現れる。
「ナコがやられたら、私はさっさと帰るからね」

「そんなヘマはしないよ」
フェイリアが杖を振ると、奈子はぼんやりと光る靄のようなものに包まれた。
聞き取れないくらい小さな声で、フェイリアが呪文を唱えている。
光る靄は徐々に凝縮し、奈子を中心に複雑な文様を描き出していた。
それにしたがって光は強くなり、やがて直視できないほどの眩さとなる。
「行くわよ」
声と同時に、光の魔法陣がはじける。
奈子は目をつぶった。
一瞬、身体がふわりと軽くなり、重力の感覚が消失する。
虚無。
それはほんの一瞬のことのようでもあるし、何時間も経ったようにも思える。
意識が希薄になってゆく。
いち……に……さん……し……ご……
奈子は、頭の中で数を数えている。

何度も転移を経験するうちに、それが意識を保つ、いちばん手っ取り早い方法だと気付いた。
もう、終わるはず……。
そう思った瞬間、全身を叩かれたような痛みが走る。
ちょうど、プールで飛び込むのに失敗して、水面でお腹を打ったような。
それを何倍にも増幅したような衝撃だった。
周囲で、ガラスが砕け散る音が聞こえたような気がする。
そして次の瞬間には、
奈子の足は、硬い石の床を踏みしめていた。

やや広めの部屋だった。
眼前には、三人の男がいた。
いずれも、驚きの表情を浮かべている。
一人は奈子のすぐ近くに。
あとの二人は部屋の奥に。
奥にいるうちの一人、四十歳くらいでいかにも

武人らしい顔つきをした男が、敵将のオルウヌ・ムカルであると気付いた。
他の二人は、おそらくまだ二十代だ。
いずれも、正騎士らしい身なりをしている。
奈子は、ほんの一瞬も躊躇しなかった。
一番近くにいた若い騎士の腹に、掌底を打ち込む。
男の身体がくの字に曲がる。
ちょうど、顔が一番打ちやすい高さにあった。
その顎を狙って、左右の掌打を続けてフック気味に放つ。
脳を激しく揺すぶられ、男の目の焦点が合わなくなった。
身体がぐらりと傾く。
奈子は男の頭を抱え込むと、とどめに、顔の真ん中に膝蹴りを叩き込んだ。
「な、何者だ、貴様？」
若い方の騎士が、剣を抜きながら叫ぶ。
奈子は男の頭を抱えていた手を離した。
ずるずると、男はその場に崩れ落ちる。

それから、奈子はゆっくりと二人の方に向き直った。
左腕を前に突き出す。
手首の、銀の腕輪がきらりと光った。
薄い笑みを浮かべて。
「味方以外で、ここに来る理由のある人間なんて、他にいないでしょ？」
「貴様、マイカラスの騎士かっ！」
若い騎士が、剣を構えてこちらに向かってくる。
なかなかすばやい踏み込みだった。
剣が振り下ろされる。
しかし奈子には、その動きがはっきりと見えていた。
右足を引いて、半身になって剣をかわし、肩から相手に体当たりする。
カウンター気味にそれを食らって、男がよろける。
その隙を見逃す奈子ではない。
鳩尾と金的への二段蹴り。
相手の頭が下がったところへ、禁じ手である顔

面への衝。
男の意識は、一瞬で吹き飛んだ。
奈子が転移してからここまで、三十秒と経っていない。
呼吸もまったく乱れていない。
なんだかんだいっても、いざ戦いとなれば身体は無意識のうちに動いてくれる。
そんな自分が大好きで、そして少しだけ嫌いだった。
奈子は、ただひとり残った、本来の標的をまっすぐに見つめる。
二人目の騎士が倒れると同時に、オルウヌは剣を抜いていた。
「こんな小娘を騎士にするほどマイカラスは人材不足なのかと思ったが……。なるほど、銀環はだてではなさそうだ。名を聞いておこう」
「ナコ・ウェル……。小娘だなんて失礼だね。こう見えても、身体はちゃーんとオトナだよ」
こんな状況下で、こんな冗談が言える自分に驚く。
身体は、燃えるように熱い。
しかし、心はひどく冷静だった。
オルウヌは、口元にかすかな笑みを浮かべる。
「おもしろい……」
オルウヌの目が光る。
緊張感が高まっていく。
周囲の空気が、まるで帯電してでもいるかのように、ぴりぴりと肌を刺す。
気のせいではない。
そう気付いた瞬間、奈子は後ろに飛び退いた。
無意識のうちの反応だった。
同時に、左右に出現した何本もの光の矢が、いままで奈子がいた空間を貫く。
「精霊魔法かっ！」
いくつかは、かわしきれなかった。
先手を打たれて奈子の態勢が崩れたところで、オルウヌが斬りかかってくる。
速い。
さきほどの騎士よりも。
はじめからかわすことを諦めていなければ、致

命傷を負ったに違いない。
一瞬ぶつかり合った二人が、ぱっと離れる。
オルウヌの剣先が、赤く濡れていた。
「やるな……ナコ・ウェルとやら」
奈子がにやっと笑う。
彼女の左肩から胸にかけて、服がざっくりと切り裂かれていた。
もちろん、その下の皮膚も。
線状の傷から、左右に赤い染みが広がっていく。
「痛いなぁ……。おっさんのクセに、やるじゃん」
奈子の右手は傷を負っていないはずなのに、血で汚れていた。
その血を、ぺろっと舐めとる。
自分の血ではない。
オルウヌの右肩に、小振りな短剣が根元まで突き刺さっていた。
奈子が普段、投げナイフとして用いているものだ。
いつも使っている、大型の短剣では間に合わなかったから。
「しかし貴様、なぜ剣を抜かん？」
剣を左手に持ち替えながら、オルウヌが訊いた。
「あんたを倒すのに、剣なんて必要ないんだ」
腰に差した大型の短剣を抜き、逆手に構えて奈子は言う。
事実、奈子はいま、短剣以外の武器を持っていなかった。
無銘の剣は、持ってきていなかった。
フェイリアに預けてある。
『もしもアタシが死んだら、フェイリアにあげる』
そう言って。
今回は、無銘の剣を使いたくはなかった。
これは、奈子自身の戦いだった。
あの、王国時代最強の武器には頼りたくない。
人を殺すのは剣ではなく、自分自身の手でなければならなかった。
人を殺すことの重みは、自分の手で受けとめなければならなかった。

そんな事情を知らないオルウヌは、侮辱されたと思ったのだろう。
顔に、怒りの色が浮かんだ。

＊　＊　＊

もう、満身創痍といってもいい。
倒した敵の数に比例するように、ダルジィの傷も増えていた。
そして、それに反比例するかのように……。
彼女に続く味方は減っている。
最初は、三十人以上いたはずだ。
それがいまや、片手で数えられるほどでしかない。
だが、目的地はもうすぐのはずだった。

不意に、総毛立つほどの殺気を感じた。
その正体がなんであるかを気にするより先に、ダルジィは床に伏せる。

たなびく髪をかすめて、赤い、灼熱の光線が通路を貫いた。
瞬時に、周囲の空気が肺を焼くほどに熱くなる。
直撃を受けた石の壁は蒸発し、その周辺部が赤熱して熔けていた。
凄まじい高熱だ。
悲鳴も上がらなかった。
かわせたのは、ダルジィだけだった。
空気が熱せられ、廊下に陽炎が立っている。
揺らめく空気の向こうに、人影が見えた。
ダルジィの記憶を刺激する姿。
「お前は……」
ダルジィは立ち上がる。
それほど、特徴のある外見ではなかった。
中肉中背、ありふれた体格。
特徴的なのは、その赤い髪と、子供っぽい笑みを浮かべた顔。
ダルジィも以前、ほんの一瞬だがその姿を目にしていた。
アルワライェ・ヌィ。

半年以上前、結界の張られたマイカラス王宮の地下に忍び込み、王国時代の貴重な書物を盗み出した人物。
その際にファージに怪我を負わせ、竜騎士レイナ・ディの墓所では、奈子と戦っている。
しかし、その正体は不明。
こんなところで会うとは、まったく予想もしない相手だった。
サラートの人間だったのだろうか。
そうとは考えにくい。
『……サラートには、どこかもっと大きな国の後ろ盾があるということですな』
王宮での会議のときの、ニウムの言葉を思い出した。
だが、そんなことはどうでもいい。
とにかく、ひとつだけはっきりしていることがある。
この男は、マイカラス王国の敵だ。
いまのダルジィには、それで充分だった。
すかさず斬りかかる。

しかしその剣が身体を薙ぐより先に、アルワライェの身体は空気に溶けこむように消えた。
そして、ほんの数歩分ほど離れた場所に現れる。
アルワライェが得意とする、極短距離の転移だ。
普通の魔術師には、こんな真似はできない。
転移魔法は長距離の移動に用いられるものであり、こんな距離では正確に制御しきれないはずなのだ。
ダルジィは、アルワライェのこの能力については知っていた。
だから特に驚きもせず、すぐに転移後のアルワライェを狙う。
数歩の距離など、瞬きひとつ分の時間もかからない。
しかしまた、アルワライェは転移でダルジィの剣をかわす。
何度も、同じことを繰り返した。
どれほどの鋭い打ち込みでも、アルワライェの方が一瞬だけ早い。
ダルジィの剣はかすりもしない。

まるでダルジィをからかっているようなものだ。
「貴様……」
さすがに息が上がった様子で、ダルジィは目の前の敵を睨みつける。
「なかなかの腕だけど、僕を倒すにはちょっと未熟かな」
アルワライェはからかうように言うと、片手を上げる。
その手の中に赤い光が生まれ、それは長く伸びて剣の形になった。
「では、今度はこちらの番ということで」
そう言うなり、アルワライェが斬りかかってくる。
速い。
立て続けの打ち込みを、ダルジィですら完全には受けきれなかった。
剣の動きが、目で追いきれない。
急所を守るのが精一杯だ。
腕や、肩から、鮮血が飛び散る。
ダルジィは後ろへ飛んだ。
下がった分だけ、アルワライェが前へ出てくる。
そこを狙って、剣を振り下ろす。
切ったのは、残像に過ぎなかった。
背後に気配が現れる。
やられる……、そう、直感した。
しかし、死を覚悟したダルジィの耳に飛び込んできたのは、くぐもった、男のうめき声だった。
はっと振り返る。
はたして、アルワライェはすぐ後ろにいた。
ダルジィの命を奪うはずだった剣を手に。
しかし……
彼の腹から、槍の穂先が突き出ていた。
青白い、魔法の光でできた槍。
アルワライェを貫いていた魔法の槍がすぅっと消えると、傷口から血が噴き出す。
「……また、貴様かっ！」
怨みのこもった目つきでアルワライェがつぶやく。
その目はダルジィを見ていない。
ダルジィには、なにが起こったのかわからな

かった。
わからないが、自分がしなければならないことは理解している。
ダルジィの剣が、目の前の男を貫こうとする。
その剣先が心臓に達する一瞬前に、アルワライェの身体は消えていた。
今度は、どこにも現れる気配はない。
どうやら、本当に逃走したらしい。
ダルジィは、茫然とした様子でその場に立っていた。
いったい、なにがあったのだろう。
アルワライェに深手を負わせたのは……。
その答えには気付いていた。
ある程度以上強力な魔法には、術者固有の波動がある。
ダルジィも以前、感じたことのある波動だ。
そもそも、アルワライェを傷つけることなど、そう誰にでもできることではない。
ダルジィは視界のすみに、鮮やかな金色の髪を見たような気がした。

＊　＊　＊

相打ち、だった。
心臓を狙った剣はぎりぎりでかわした。
剣は、奈子の左肩を貫く。
それでも奈子の拳は勢いを失うことなく、オルウヌの顔面、鼻と口の間の――人中と呼ばれる顔面の急所を捉えていた。
衝（しょう）、と呼ばれる極闘流の突きは、表面的な破壊力ではなく、内部への衝撃の浸透に主眼を置いている。
正中線を狙って打てば、打撃のエネルギーは脊髄を突き抜け、全身を一時的に麻痺させる。
オルウヌの身体は、糸の切れたマリオネットのようにその場に崩れ落ちた。
奈子は大きく……肺の中の空気をすべて吐き出す。
二、三度、深呼吸を繰り返した。
肩の傷からの出血がひどい。

他にも出血している傷はいくつもある。
早く終わらせて、手当をしなければならない。
奈子は、床に落ちている短剣を拾い上げた。
それを握って、倒れているオルウヌに近づく。
完全に意識を失っている。
いまなら……
短剣を握る手に力を込める。
その手が、小刻みに震えていた。
じっと、床に倒れている男を見つめる。
心を決めて、すぅっと息を吸い込み、しばらくの沈黙のあとそれを吐き出す。
何度も、繰り返す。
それでも、できなかった。
この男に恨みがあるわけではない。
この男が憎いわけではない。
だから、殺せない。
オルウヌが死ねば、さすがにサラートはマイカラスへの侵攻計画を見直すだろう。
奈子にできる範囲では、マイカラスを救ういちばん確実な方法だった。

しかも犠牲者は、たった一人だ。
（マイカラスのため、ハルティ様やアイミィのため……）
なのに、
ただ、短剣を持った手を振り下ろす……それだけのことができなかった。
奈子は、自分の手を見る。
血で、汚れている。
自分の血、そして倒した相手の血。
それが混じっている。
血塗れの手……。
突然、吐き気がこみ上げてきた。
手で口を押さえても、胃の内容物の逆流を止められない。
よみがえる記憶。
忘れてしまいたい、しかし、決して忘れることのできない記憶。
傷が痛い。
もう、とっくに治ったはずの。
わずかな傷跡が残っているだけの。

胸の傷が痛んだ。
血塗れのつぶれた顔。
床に広がる血だまり。
人の命を奪った自分の手。
決して消すことのできないイメージが、次々と浮かんでくる。
「できない……アタシには、できないよ……」
胸を押さえながら、奈子は嘔吐していた。
胃の中が空っぽになっても、胃液の逆流は止まなかった。

扉が開いた。
奈子は反射的にそちらを向く。
反射的に、戦いの態勢をとっていた。
しかし、そこに立っていたのは敵ではない。
全身傷だらけで、血塗れの剣を手にした女騎士。
乱れた長い銀髪も、血で汚れていた。
顔には、驚きの表情が張り付いている。
もっとも、それは奈子も同じことだったろう。

それでも多分、奈子の方が先に我に返ったはずだ。
ダルジィがここにいることは知っていたのだから。
それでも、やはり驚きだった。
これだけの傷を負いながら、たった一人でついにここまでたどり着いたのだ。
フェイリアは、勝算は一割もないと言っていたのに。
「……なぜ、お前がここにいる？」
ようやく、目の前の人物が幻でもなんでもないと確認したのか、ダルジィがゆっくりと部屋に入ってきた。
歩いたあとに、血の痕が残る。
部屋の中をゆっくりと見回し、倒れている人物を確かめる。
「先を越されたか……。なぜとどめを刺さん？貴様の、手柄だ」
奈子はそれには答えない。
答えられない。

黙って、うつむいている。
ダルジィは奈子を睨みつけた。
短剣を握って、震えている手。
床を汚している吐瀉物。
そういったものに気付く。
「……できないのか。そうだろうな」
ほんの少し軽蔑したような、しかし納得した口調で言う。
ダルジィは剣を逆手に握り直した。
奈子がなんの反応もできないうちに、その剣が倒れているオルウヌの頭を貫く。
「……！」
奈子は小さく息をのんだ。
ダルジィを見つめる。
「私はマイカラスの騎士だ」
まったく表情も変えずに、ダルジィは言った。
「国と、陛下を守るためならどんなことだってできる。そのためにここまで来た。そのために、私はここにいるんだ」
ダルジィはまっすぐに奈子を見て言った。

深い色の瞳をしていた。
殺気など、まるで感じられない。
深い、深い、想いを秘めた瞳。
（この人……）
奈子ははっと気付いた。
ダルジィがどうして、これだけのことができたのか。
どうして、奈子を目の敵にしていたのか。
（この人、ハルティ様のことが好きなんだ……）
考えてみれば、当たり前のことだ。
ハルティはマイカラスの国王であり、強く、そして容姿も優れている。
マイカラスの若い娘なら誰だって、彼に惹かれるだろう。
そしてダルジィはマイカラスの名家の長女で、超一流の騎士で、しかも美人だった。
千五百年前、大陸南部の小部族の長だったエストーラ・ファ・ティルザーは、黄金竜の騎士エモン・レーナと出会い、共に戦ってトリニア王国を築き上げた。

以来、美しさだけではなく強さを兼ね備えた女性が尊ばれるのが、トリニアの時代からの伝統だった。

トリニアの文化を色濃く残しているマイカラスでは、特にその傾向が強い。

それを考えれば……。

ダルジィは、ハルティの妃候補の筆頭だったのではないだろうか。

おそらく本人も、そう意識していたことだろう。

（……これから、ハルティ様に会いにくくなっちゃったな……）

ダルジィの想いを知ってしまったから。

強く、そして真剣な想いを。

だからなにも言えずに、奈子は黙って立っていた。

# 終章　金瞳（キンノヒトミ）

すでに、夜は明けていた。
砦のところどころから、まだ白い煙が立ち上っている。
奈子とフェイリアは、無言で砦を見つめていた。
奈子は地面に腰を下ろして。
フェイリアはその隣に立って。
もう、マイカラスの軍勢の姿はない。
目的を果たし、素早く撤退したあとだった。
しかし指揮官を失ったサラートの軍勢は、いまだ動揺おさまらない。
もう少し混乱がおさまれば、おそらく兵を引くことになるだろう。
実質、戦争はもう終わったのだ。
ハルティの出陣は回避できた。
少なくとも、それだけは成果だった。
「マイカラスへは、行かないの？」
奈子はなにも言わず、ただ黙って首を横に振る。
「……そう」
フェイリアもそれ以上続けようとはしない。
奈子に気を使って、黙っている。
マイカラスへ戻ってハルティと会うのは気まずかったし、かといってすぐ帰る気にもなれなかった。
ひどく、虚ろな気持ちだった。
だから、ただ黙って座っていた。
これから何をしたらいいのか、わからなかった。
そんな奈子の前に、不意にひとつの人影が現れる。
一目で誰かわかる、鮮やかな金髪と金色の瞳を持った少女。
「ファージ……」
奈子は、やや緊張した声音でその名を呼んだ。
ちらりと横目でフェイリアを見る。
彼女もかすかに緊張しているように感じられた。
王国時代の力を探し求める者と、それを封じる者。
二人は、敵同士のはずだ。
フェイリアはじっとファージを見つめている。

ファージは一瞬だけフェイリアに目をやると、あとは無視して奈子に近づいた。
あまり、感情の感じられない表情をしている。
「……迎えに来た。終わったんなら、帰ろ」
「ファージ……」
奈子は、少しふらつきながらも立ち上がった。
「とりあえず、ありがと。今日のところは……ね」
ファージが、フェイリアに向かって言う。
フェイリアは黙って、ただ口の端にかすかな笑みを浮かべる。
「じゃあナコ、またね。あ、これ、預かりもの」
フェイリアが剣を取り出す。
奈子が預けていた剣。
無銘の剣、竜騎士レイナ・ディ・デューンの剣。
しかし奈子は、それを受け取らなかった。
「フェイリアが持っててていいよ」
アタシには、竜騎士の剣を持つ資格なんてないから――と。
しかしフェイリアはそれを断る。
「まさか、私はまだ死にたくないわ」
ちらりとファージを見ながら、笑ってそう言う。
無理やり奈子の手に剣を押しつけて、
「じゃ、またね」
それだけ言うと、フェイリアはいずこかへ転移していった。
あとには、二人だけが残る。
まず、なにを言えばいいのか……。
奈子はファージを見た。
深い、金色の瞳がまっすぐに奈子を見つめていた。
じっと見ていると、魅入られそうになる。
強い力を持った、金色の瞳。
「ファージ……ありがと」
「ん？」
「ダルジィが言ってたよ。助けたの、ファージでしょ？」
「知らないよ……」
ファージはとぼけた。
「私はナコを助けに来ただけだもの。戦争には介

入できなくても、私がナコを助けるのは勝手だもんね。ま、流れ弾が誰かに当たったりしたかもしれないけど……」
奈子がぷっと吹き出す。
「ファージ……」
「ソレアには、ナイショだよ」
「……うん」
本当は、訊きたかった。
『墓守』の話について。
フェイリアと一緒にいたのだから、奈子がそれを知っていることはファージも気付いているはずだ。
でも、ファージはなにも言わない。
だから、奈子もなにも訊けない。
「ありがとう」
ただ、そう言うだけだ。
「お礼なんていいよ」
笑いながらファージが抱きついてくる。
奈子の唇をぺろぺろとなめるようなキスをして。
「……今夜、ベッドの中で感謝の気持ちを表してくれれば」
「アタシ、今日は疲れてるんだけどなー」
「じゃあ、私がマッサージしてあげる」
ファージが、奈子の身体に手を這わせる。
「こら、どこ触ってンのっ！」
口では文句を言いながらも、奈子は本気でいやがってるようには見えなかった。

＊　＊　＊

（今日はちょっと、由維と顔会わせづらいよなー）
そんなことを考えていたら、
「奈子先輩てば、まーた浮気してましたね？」
顔を見るなり、言われてしまった。
ゴールデンウィークの最終日、旅行に行っていた由維がおみやげを持って奈子の家へやってきたときのこと。
「な、な、な、なによいきなりっ？」
残念ながら、声が裏返っていた。

玄関を開けると同時にこんなこと言われて、しかもそれが事実であれば、うろたえるのは当然だ。
自分の首を指差して、由維が笑う。
「キスマークがついてますよ、ココ」
「ええっ？」
あわてて、手で首筋を隠す。
「ファージってば、キスマークはつけるなって言ったのに！　それとも亜依……あ！」
あわてて口を押させる。
またやられた……と。
カマをかけられたのだ。
由維は腕組みをして、笑いながらも眉間にしわを寄せている。
「私が見てないと、すぐこれなんだから」
「いや……あの……ね……。別に……そんなつもりじゃ……」
「奈子先輩て……」
呆れ顔で言う。
「どこか倫理観とゆーか、貞操観念とゆーか……欠如してますよねー」
「うぅ……」
奈子はうめいた。
たしかに、それはちょっと自覚ある。
自分でも、これじゃいけないと思っているのに、ついその場の雰囲気に流されてしまう。
由維のことはたしかに好きだ。
いちばん大切な存在であることは間違いない。
だけど、亜依も、ファージも、そしてハルティも好きだ。
ぎゅっと抱きしめたり、キスしたりするのは……気持ちいい。
やっぱり、浮気っぽいのかな……。
それとも、単にエッチなだけ？
我ながら困った性格だ。
しかも、それがすぐにばれてしまうというのも問題がある。
亜依のときもそうだったけど、そんなに、考えていることが顔に出てしまうのだろうか。
ぺちぺちと、両手でかるく頬をたたいてみる。
どうも、嘘や隠し事は向いていないらしい。

「どうして、アタシの考えてることがすぐにわかるの？　あんたも亜依も」
「そりゃ、わかりますって」
由維は持ってきたお菓子の包みを開け、お茶の用意をしている。
暖かな、紅茶の香りがただよってくる。
「奈子先輩て、根が正直ですからね。大人になってもマージャンやポーカーはやらない方がいいですよぉ」
「それはもう手遅れ……」
「なにか言いました？」
奈子の前にティーカップとおみやげのクッキーを置きながら、由維が首をかしげる。
「ううん、別に」
曖昧にごまかして、ティーカップを口へ運んだ。
実は、向こうの世界にもポーカーとよく似たカードゲームがあって、以前、ファージと遊んだこともある。
そのときファージが「負けた方が、なんでも相手の言うことをきく」という賭を持ちかけてきて——奈子はやっぱり負けた。
賭けに勝ったファージがなにを要求したのか……。
それはいうまでもないことだろう。

あとがき

お久しぶり、の本編第六話です。

最近、長大化の一途をたどっていた『光の王国』の本編ですが、今回はちょっと短めのお話になりました。

原稿用紙で二百十枚強、『レイナの剣』と同じくらいですかね。

しかも今回、主人公の出番が妙に少ない。

なにしろ、タイトル章の『銀砂の戦姫』に登場しないんですから。

これでいいのか主人公（笑）。

本編を読んだ方はおわかりでしょうが、このタイトル、奈子ではなくてダルジィのことです。

『レイナの剣』のあとがきで、「ダルジィを主役にして外伝を書きたい」と書いていたのを憶えているでしょうか。

実は、この話がそう。

もともとダルジィ主役の外伝として考えてた話なんですが、内容的にどうしても本編のストーリィに絡んできてしまうので、奈子の出番をつくって本編にしてしまったというわけです。

それでも、はじめに考えていたよりは奈子の出番は増えましたね。

ホントは、もっとダルジィばかりが目立つはずだったんだけど、辛うじて主人公の面目をたもったというところでしょうか。

前回出番のなかったファージやハルティも一応登場したし、お気に入りのフェイリアや亜依はレギュラー化しつつあるし、エイシスは痛めつけられたし（笑）、とりあえず書きたいことは全部書けたかな？

でも、今回はちょっと手こずりましたねー。

『ファ・ラーナの聖墓』のあと、『殺意の女神』『一月うさぎのお茶会』『月羽根の少女』『チョコレート娘2』と快調に新作を発表し続けてきたのですが、ここで力尽きてしまいました。

おまけに、他のことに気を取られて執筆に集中できない日が続いたし……。

それでもようやく書き上げることができて、

ほっとしています。

さて、次回作ですが……

次はたぶん、『光』以外の作品を一編書くことになるかと思います。

（最近要望の多いアレ……になるかもしれない。まだ未定）

『光』の次回作は、『レイナの剣（つるぎ）』に始まった第二部・竜騎士編の最後を飾る長編『金色（こんじき）の瞳』になる予定。

ちなみに、このタイトルは「こんじきのひとみ」です。

くれぐれも「きんいろ」と読まないように。

これまでで一番の大作になる予定……なんですが、実はまだストーリィがまとまっていません。

ちゃんと一話におさまるのかどうか、とっても不安。

いざ公開してみたら『金色の瞳・前編』とか、もっと悪いことに『金色の瞳・1』なんてことになってるかもしれませんが、そのときは「テメーは前〇珠子かぁっっ？」とつっこんでくださいな（笑）。

それでは、また次回作でお会いしましょう。

一九九九年四月　北原樹恒

kitsune@mb.infoweb.ne.jp
創作館ふれ・ちせ
http://plaza4.mbn.or.jp/~kamuychep/chiron/

## 閲覧に関する注意事項

このＰＤＦファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

### ●モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Ｅｎｔｅｒキー（Ｒｅｔｕｒｎキー）で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合（１２８０×１０２４以上）、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、１ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの方が適しているかもしれません。（その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです）どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

### ●印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはＢ５を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「２ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれません。（縮小してＢ６用紙に印刷するのでも可）

アクロバットのバージョンが４の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われますのでご了承ください。